

III

第五回公開講座

をとらえたのが、新劇の俳優、指導者として活躍後、水俣市に移り住み演劇を通して水俣病の悲劇を全国に問い続けている砂田さんの生き方と芝居だった。合宿で見たのは「草の学校」という作品。衣装も仕上げそのく一部が演じられただけだったが、砂田さんふる「草の精」が、水俣病という悲劇を背景にしなが生き物としての命の貴さをやさしく力強く訴えかける。それを思つかいが聞こえる間近で体験した。

今回の公演の運営幹事を務める法学部四年生の山下智美さん(画)は「自然体で生きる砂田さんから伝わってくる温かさに触れ、何となく一度全部見たい、自分たちの力で上演させたいと思った。婦人の新幹線の中からもそんな声があがったんです」と話す。

夏休みが明けてから準備にどりかかった。砂田さんとの交渉は二つ返事でOKが得られた。ボスターの製作、会費探し、前

売りの券さばきなど、学生みんなで取り組んだ。公演では「草の学校」のほか、仮面と黒衣を身につけた砂田さんが天草なまりで演じる一人芝居「天の魚(いわい)」や、水俣病と闘う人間の在り方を激しく訴える「勸進帳」の三作品が上演される。公演に全面的に協力している谷口助教は「言語の限界を超えて訴えかけてくる砂田さんのパフォーマンスの知ともいえない世界を味わってほしい。今後若い学生たちの感性に触れながら、授業を通して深刻な現実を見つめていきたい」と話している。

X X
会場は神戸市中央区相生町二丁目のシーガルホール。午後七時開演。料金は一般千三百円(当日千五百円)、中学生以下八百円(同千円)。また二十四日午後一時半から甲南大学十号館で「私の演劇論」と題した砂田さん講演会も開かれる。料金五百円。問い合わせは(078)412-4140(四三)へ。

神戸新聞

心を通う演劇の砂田明さん(神戸市中央区、シーガルホールで)



水俣病の悲劇切々

真劇女 砂田明さん 神戸で感動の公演

水俣病をテーマに演劇を続ける砂田明さん(熊本県水俣市在住)の舞台を神戸でも、と甲南大学の学生らが主催して二十三日、神戸市中央区相生町一のシーガルホールで「現代夢幻能―仮面のカタルシス」が上演された。

招いたのは甲南大学文学部、谷口文章助教授の哲学ゼミナール。環境汚染など社会問題を追求するため、積極的

に現地を訪れ調査を続けている。この夏、八月十六日から三日間、恒例の夏合宿で水俣を訪れて砂田さんと出会い、水俣病の悲劇を訴える「草の学校」という作品に感動しているもの。

運営を務める学生たちは「激しい怒りと正義感を秘める人柄に触れ、こゝまでやってきた。一人でも多くの人たちに感じてもらえれば」と語っていた。

「仮面のカタルシス」は「草の学校」「天の魚(いわい)」 「勸進帳」三作で構成し、「草

発行所 神戸新聞社
神戸市中央区築井通7-1-1
郵便番号 651
振替口座 神戸 9-20
©神戸新聞社 1988年



大阪府北區中之島3丁目
 2番1号郵便番号500-11
 朝日新聞大阪本社
 電話 06-231-0131
 郵便振替口座 大阪5-550088
 ©朝日新聞大阪本社1988

2面 内閣不信任に思惑複雑
 3面 花博地下鉄は20年赤字
 7面 ハンガリーに自由二法
 9面 揺れるリクルート経営
 12面 水俣の一人芝居を招く
 13面 新語・流行語も、自粛々
 20面 終戦詔書の起草は教授
 21面 「橋の子」少女らを捕縛



甲南大生が
公演を企画

現地合宿で得た感動
一人芝居で伝える

神戸の甲南大学の学生たちが二十三日、水俣病をテーマにした演劇活動を続ける砂田明さん(水俣市在住)を神戸に招いて「現代夢幻能―仮面のカタルシス」と題した一人芝居の公演を開く。ゼミ合宿で訪れた水俣市で触れた豊かな自然の中いまだに残る水銀の恐怖、そして患者たちのたくましく生きる姿を一人でも多くの人に知ってもらいたいと実現させたものだ。

彼らが参加しているのは、甲南大文学部の谷口文雄助教(曾いが講師)している哲学のゼミナールで、文学部ばかりでなく法学、経済、経営、理学など他学部の学生も含め二十人余りが受講している。

恒例になっているゼミ合宿では、淡路島モンキーセンターや小豆島で奇形ザルの調査、愛媛や奈良の無農薬農家の訪問を通じて残留農薬などの食汚染問題、環境破壊問題を取り上げ、理論だけでなく実践を求める心と味違った生きた哲学を目指してきた。水俣病についても数年前から、石牟礼道子の「西海浄



公演打ち合わせをする学生たち(中央後方が谷口助教)＝神戸市東灘区岡本の甲南大学で

科書で習う歴史の事実であり、加えて暗いイメージがつきまどっていた。

しかし、八月十六日から三日間の合宿でその考えは一変した。のどかに広がる青い空と海、輝く太陽。その一方で、海の底には依然水銀が堆積(たいせき)し漁業が禁止され、今もなお患者認定を求めて訴訟が続けられている現実。

土や砂田さんの活動を追ったビデオなどをテキストに使っており、今年、念願の現地調査が実現した。

とはいっても、学生たちが描く水俣の姿は「すでに過去のもの」、「灰色の空、モノクロームの街」といふもの。昭和四十年代生まれの彼らには水俣は教

講義を受けたら、低農薬の甘夏ミカン畑や作楽所の見学、水俣病患者の田上義春さんから話を聞き、夜遅くまで語り合った。その中で、特に学生たちの心



JAPAN JUNG CLUB NEWSLETTER

❧ AUTUMN ❧

編集発行 日本ユングクラブ事務局 東京都大田区山王1-37-3山王教育研究所内 TEL. 03-775-8155

1988・9・15 No. 19

深層心理研究会

一人芝居「砂田明の世界」への御招待

谷口 文章

ユングの共時性の現象が、現実には生じることを実感したこの数日であった。続発した海難・飛行機事故はそれを示している。さらに、私事にわたって恐縮であるが、そのあたりの事情を述べることによって、深層心理研究会第5回公開講座「一人芝居「砂田明の世界」」の予告としたい。私たちのゼミでは、この8月熊本県水俣市に水俣病の歴史と現状を調査した。その際、水俣病を演劇によって訴え続けてこられた元新劇俳優砂田明氏(81年紀伊国屋演劇賞・特別賞受賞)を訪れた。その余韻も醒めやらぬ間に、氏の芝居と演劇論を公開講座として主催したく昨日すべての準備を調べたところであった。その翌日の今朝、なんとユングクラブ編集者の田中秀昌氏から公開講座についてのお電話を頂き、早々に原稿の依頼があったことに驚いている。重要でしかも運命的な事象は、原因=結果という因果的連鎖ではなく、共時的な布置において生じるようである。

さて、深層心理研究会は、教員・精神科医・院生・学部学生が運営している。その母胎



である哲学教室では、一方で講義において、「理論の知」の観点から哲学の古典を研究し、他方で「実践の知」の観点から環境汚染・破壊等の社会問題を追求してきた。そして両者を総合して「深層の知」を深めるために、研究会・公開講座を主催し、それによって哲学、心理学、文学等学際的討論の場を提供する意図で続けられてきた。その意味で、今夏の水俣市への研修旅行は「実践の知」を実現する一貫上にあったが、さらに砂田明氏という最適の方をお招きして「深層の知」を一層深め



たく考えている。

そのようなわけで、砂田氏のお人柄とその世界的一端を御紹介しておこう。深層の知の一つの表現である演劇的象徴は、人間の内面の赤裸々な発露である。それは自覚せざる無意識の活動であり、透明と不透明が醸し出す恍惚とした幻影の跳梁なのである。このような独自の演劇の世界を創り出す砂田氏にお会いした瞬間、内面の世界を自由に表現されるお人柄だと感じた。有機水銀で汚染・破壊された環境にもかかわらず、牧歌的な静寂さで人々を抱擁する水俣という風土と同じように、氏は激しい正義感と怒りを秘めながらも、なにかしら人を魅きつけ圧倒するパーソナリティの人であった。

その情況は、氏の一人芝居にも現われる。怨念と諦念をたたえながら、なにを見つめるのか人を吸いつけて離さない目（まなこ）、魂の絶叫がもれる開かれたままの口、そのような仮面が真暗闇の舞台を背景として夢幻の絶対世界から立ち現われ、相対の悲喜劇の世界に執着する私たちを嘲笑う。暗い舞台から、無表情な仮面の一人芝居において、どうしてこのような豊穡な光景が展開できるのか。ど

のようにして絶対の無意識という暗闇から、相対意識の日常生活に現われ出て、再び幻影の中にもどっていくのか。その時感じる光と影の彩なすカタルシスは一体なになのか。

このようなことを、次回の砂田明氏の講演で体験できるのではないかと期待している。

<深層心理研究会第5回公開講座予告>

一人芝居「砂田明の世界」

第一日目：昭和63年12月23日（金）

6:30~9:00p.m.

公演・「草の学校」「天の魚」「勸進」

場所・シーガルホール（神戸文化小ホール）

入場券・前売券1300円、当日券1500円

第二日目：12月24日（土）1:30~3:30p.m.

講演・「私の演劇論」

場所・甲南大学10号館 1021教室

参加費・500円

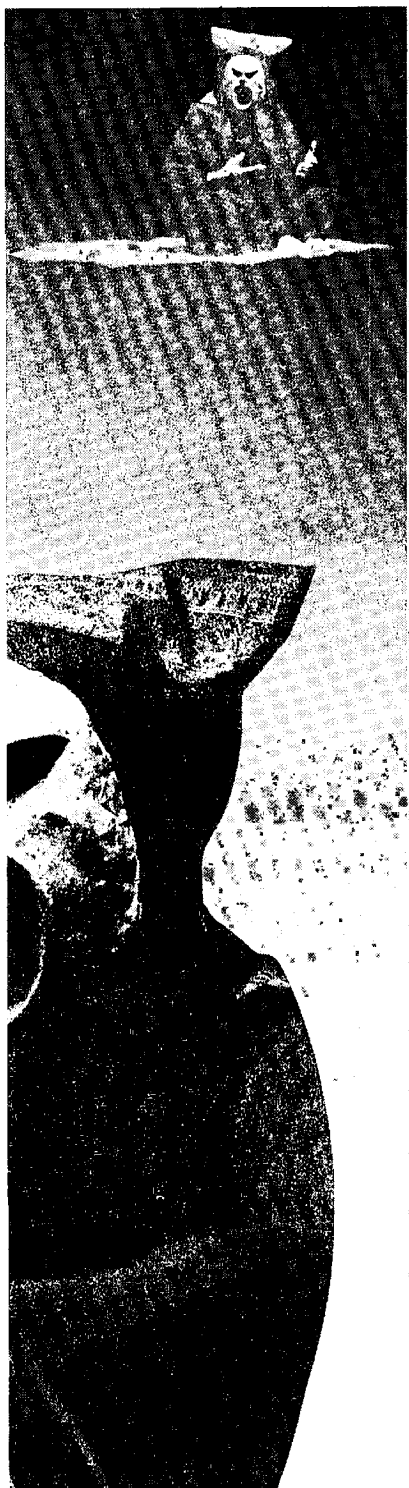
◎申し込みは、何日目参加希望かを明記して現金書留で下記までお送り下さい。

〒621 京都府亀岡市篠町見晴2-3-11

電話 07712(3)9464 谷口宛

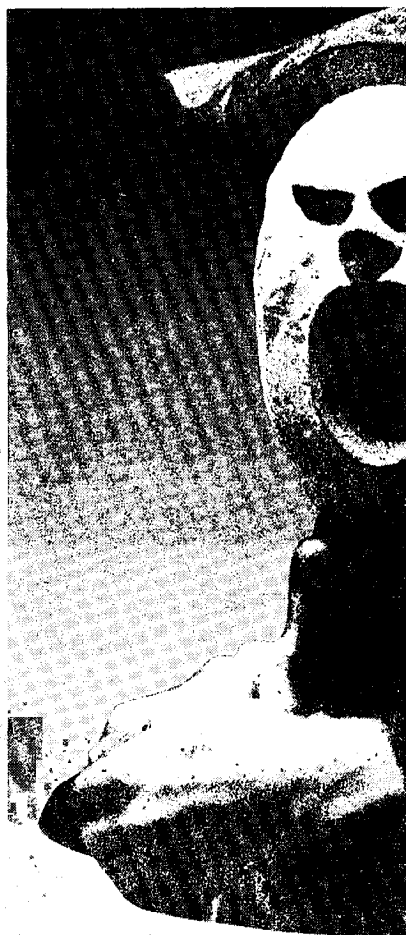
（甲南大学助教授・研究会世話役）

（ニューズレターNo.19より転載）



砂田明

現代夢幻能
ペルソナ
 仮面のカタルシス



一天の魚・草の学校・物進眼一



日時 十一月一日(金)午後三時 開演 午後七時(土)開演
 場所 シェンガキホール(神戸市東灘区)
 主催 明治大学文学部 演劇教育
 後援 演劇座、イオンスピリット
 志願者 六十七名 西 四 西 四
 入場料 一般 八〇〇円 学生 四〇〇円
 中学生 四〇〇円
 前夜祭 魚・草の学校 演劇座主催
 十一月六日(土) 九時開演
 十一月七日(日) 九時開演
 十一月八日(月) 九時開演

現代夢幻能 砂田明・仮面のカタルシス

原作 石牟礼道子 / 脚色 砂田明 / 出演 砂田明・エミ子



12月23日(金)午後7時

場所 シーガルホール (神戸文化小ホール)

プログラム：天の魚・草の学校・筋違橋

入場料 一般 1,500円(1,500円)

中学生以下 800円(1,000円)

主催 甲南大学 文学部 哲学教室

後援 (株)トリコ・インダストリーズ

お問い合わせ (078) 211-4043

前夜祭会場 甲南大学在学/教員プレイガイド

チケット・セブン 06-363-9999

チケットぴあ 06-363-9999

現代夢幻能 砂田明・仮面のカタルシス

— 天の魚・草の学校・筋違橋 —

原作 石牟礼道子

脚色 砂田明

出演 砂田明・エミ子

入場料

前夜 1,300円

(中学生以下800円)

当日 1,500円

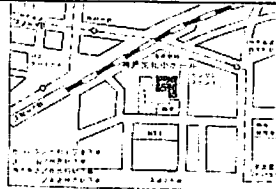
(中学生以下1,000円)

日時 12月23日(金)午後7時 (開場:午後6時30分)

場所 シーガルホール (神戸文化小ホール)

主催 甲南大学 文学部 哲学教室

後援 (株)トリコ・インダストリーズ



小田原ビル神戸中央郵便局より徒歩5分

パンフレット

砂田 明 勸進公演

海よ母よ子どもらよ

1988年 12月23日(金)午後7時開演
シーガルホール(神戸文化小ホール)
主催 甲南大学 文学部 哲学教室
後援(株)トリコ・インダストリーズ

ごあいさつ

今年も残り少なくなりました。

本日はお忙しい中、ようこそ、お越しくございました。

さて、本日は、砂田 明氏によります。「草の学校」、「天の魚(いを)」、「勸進帳」をご覧頂きます。

とりわけ「天の魚」は、《現代夢幻能》と銘打たれ、独特の仮面が、光と影の彩なす幻想的な世界へと私たちを誘います。その舞台空間は、透明度が高いまま、深く重く水俣の世界を閉じ込めていると同時に、人間の心的世界へと開放されて、普遍的芸術にまで高められています。私たちは、そのような空間を共有することで、不思議な心のカタルシス(浄化作用)を経験することでしょう。

それでは、最後までごゆっくりご覧下さいますようお願い申し上げます。

本日はご来場下さいまして、誠にありがとうございました。

甲南大学 文学部 助教授 谷口文章

プログラム

ごあいさつ

甲南大学 文学部 谷口 文章

草の学校

原作・脚色 砂田 明

休憩

天の魚

原作 石牟礼道子

脚色 砂田 明

勸進帳

作 砂田 明

いきさつ

私たち甲南大学文学部哲学教室では、講義以外に、春と夏の合宿、および公開講座を行ってきました。

春季合宿はセミナーハウスで研究発表や討論会を実施し、夏季合宿では環境汚染・破壊などの社会問題を追及するために、実際に現場でそれらの問題に取り組んでおられる人々を訪問したり、野外調査を実践してきました。また、公開講座では各回共通のテーマを決め、哲学だけでなく、心理学、文学などの専門の先生方をお招きして講演や討論会を開き、学際的な場を提供してまいりました。

そうした中で、今年度の夏期合宿では、四大公害病の一つである水俣病を取り上げることになりました。そこで、水俣問題をはじめ、さまざまな社会問題を一人芝居によって訴え続けておられる砂田明氏を訪ねて、私たちは熊本県水俣市へと向かいました。

水俣は、有機水銀によって汚染破壊されながらも、牧歌的な静寂さで人々を抱擁する風土でした。この合宿で私たちは、すでに忘れ去られつつある水俣において、今日もなお、患者認定の裁判や海底の残留水銀などの問題が残されている現実を知りました。そしてまた、内に激しい正義感と怒りを秘めながら人をひきつけ圧倒する砂田氏のお人柄に触れ、私たちは多くの事を感じ、学ぶことができました。

その興奮は合宿を終えた後も醒めやらず、水俣で少ししか見る機会がなかった氏の一人芝居を、中でも現代夢幻能と呼ばれる「天の魚」を実際に目の前で見たいという思いはつづける一方でした。見る者を不安にする怨念に満ちた仮面が、真暗闇の舞台の上でどのような光景を展開するのか。相対の悲喜劇の世界に執着する私たちに、あの絶対の暗闇から何を突きつけてくるのか。そう考える内に、どうしても自分たちの手で神戸での公演を実現させたいと思いたちました。

公開講座と重ね合わせて、話が軌道に乗りだしたのは、氏に快く承諾して頂き、スポンサーにも恵まれたお陰でした。初めてのことで試行錯誤の繰り返しでしたが、会場の手配をはじめ、ポスター、チラシ、パンフレット、チケットの制作や配布、その他、一生懸命準備してきました。多くの方々の御支援を賜りまして、何とか今日の日を迎えられましたことを感謝いたします。

なお、本日の公演に続き、明日24日(土)甲南大学10号館にて、第5回公開講座・砂田明講演会「私の演劇論」(午後1:30~3:30)を開催いたしますので、あわせてご参加頂ければ幸いです。

砂田 明氏紹介

1928年京都市生。高等商船神戸分校機関科在学中に終戦を迎える。軍国主義から一転して民主主義となり混乱している時代の中、1947年に同校を卒業し、甲種二等機関士の免状を手にするが、それをながめている内に突然役者になろうと決心し、半年後上京する。舞台芸術学院を経て、八田元夫演出研究所、新劇場、東西の商業劇場、劇団芸協、地球座などを遍歴し、舞台役者としての修業を積む。東西の商劇場を遍歴してた時期には先代猿之助、先代幸四郎はじめ、勘三郎、長谷川一夫、渋谷天外、藤山寛美、森雅之、淡島千景、山田五十鈴、沢村貞子、ミヤコ蝶々、森繁久弥氏らと共演し、1960年代には俳優養成所の講師となり市村正親（劇団四季）、小野寺昭や加藤健一（1982年度紀伊国屋演劇賞）を指導した。

1970年、地球座で新しい劇に取り組んでいる時、石牟礼道子著『苦海浄土』とめぐりあい、それをきっかけとして戦後生まれの若者たちと共に水俣巡礼行脚を行う。翌1971年には「天の魚」の章をのぞいて『苦海浄土』を劇化し、東京から水俣への上演行脚を行う。

1972年家族を伴い水俣漁村の袋・湯堂へ移住、農業見習いと個人紙「不知火の海から」の刊行開始。1975年個人紙を軸に『祖さまの郷土・水俣から』を上梓し（講談社刊）、運動誌「不知火——いま水俣は」創刊に当って責任編集者となる。1979年、水俣病激症患者・田上義春氏とともに新しい自給農園を拓くため袋・神川へ移り、この地に水俣病の犠牲となった生類いっさいを祀る『乙女塚』を築くため演劇活動を再開し、一人芝居「海よ母よ子どもらよ」による全国勸進行脚を始めた。

現代夢幻能「天の魚」により、1981年1月第15回紀伊国屋演劇賞の『特別賞』を受賞し、同年4月には立教大学で上演400回を記録している。



作品解説



「草の学校」

原作・脚色 砂田 明

この作品は「《大道芸》海の胎（はら）」に収められているものである。

気取りのない関西弁の「草の精」が、人間も含めた自然界のすべてのものの「いのちのつらなり」の貴さを訴えかける。親近感のある「草の精」であるからこそ、彼の言葉、その訴えかけも、より身近なものとして観客に迫ってくる。

草の学校の授業が終わって、砂田氏夫婦そろってのムツゴロウおどりで楽しげな雰囲気の中、幕が下りる。

「天の魚（いを）」

原作 石牟礼道子

脚色 砂田 明

夢幻能は、旅人や僧が、夢まぼろしのように故人の霊や神・鬼・物の精などの姿に接し、その物語を聞き、舞を見るといった筋立てになっている。このような形態をとる本日の上演作は、石牟礼道子著『苦海浄土』の中の「天の魚」という章を砂田明氏が脚色、1979年11月23日福岡市において初めて上演されたものである。

黒一色の舞台に、仮面をつけ、黒衣を身にまとった砂田氏——老漁夫、江津野家の爺さまの霊——があらわれ、彼の一家をある女性が訪ねるところから物語が始まる。

日本中が東京オリンピックにわき立っていた1964年の初秋、猿郷（さるご）の女が、百間港に近い水俣市江添の丘に住む江津野壱（もく）太郎少年とその一家を訪れた。江津野一家は一本釣りの専業漁家であるが、当主である清人をはじめ、当主の代わりに一家の舵とりをしている爺さま、主婦がわりの婆さまの上にも水俣病が色濃く影を落としている。

江津野老は「こるがあるために生きとる世の中でござす。」と言うほど好きな焼酎を飲みながら、訪れてきた女に天草なまりで語りかけるのだった。

「勸進帳」

熊本県水俣市袋——海山が迫り、燃えるような夕焼けが美しい浄土のようなその地に、水俣病の犠牲となった生類いっさいを祀る『乙女塚』を築くため、一人芝居「海よ母よ子どもらよ」による全国勸進行脚が始められました。これを出発点として、現在、砂田氏著書の印税や公演に際してよせられる寄付などにより運営されている“乙女塚基金”は、水俣病患者の方たちの援助の他に、海によって結ばれているアジアの人々とともに平和をめざす活動などを支援しています。

本日、公演会場（ロビー）に、砂田氏著書販売コーナー・募金箱を設けておりますので、皆様の御協力をお願い申し上げます。

最後に、この舞台をしめくくる、氏の切実な訴えかけの詩を紹介します。

「起らなはれ！！」

もし あんたが 人やったら
起らなはれ 戦いなはれ
公害戦争や 水俣戦争やでえ
戦争のさらいなわし等のやる戦争や 人間最後の戦争や 正念場や
勝たな あかん 勝らめかな
——子どものために 孫のために 親のために 先祖のために
そうしてこの自分自身のために 一度しかない人生のために

……負けたら？

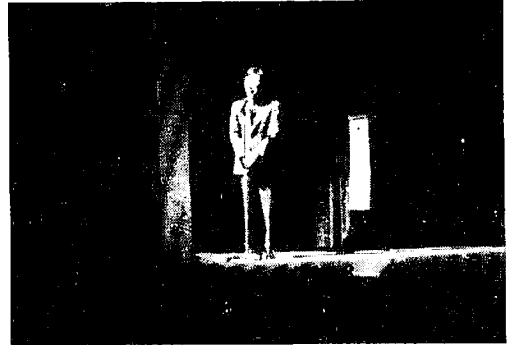
負けたら一卷の終りや ^{なごみ}生殺しの毒地獄や
救も知れんほどぎょう山 お仲間の生類殺した室長はんなあ そのかわりに
ビニールやら ^{じん}ギッチャギッチャした油やら エントツやらフルマやらテレビやら
救も知れんほどぎょう山のガラクタ残して
この地球から 綺麗な青い星から
消えてしまうだけのハナシや

（抜粋）

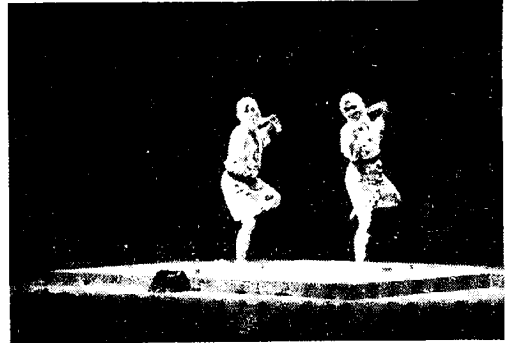
<会場風景>



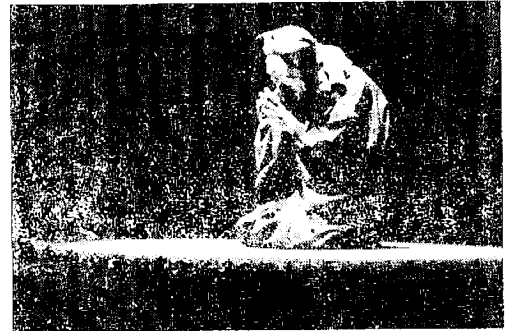
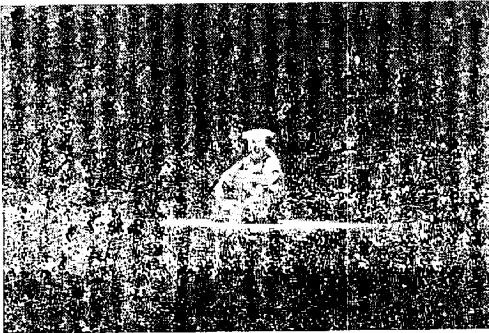
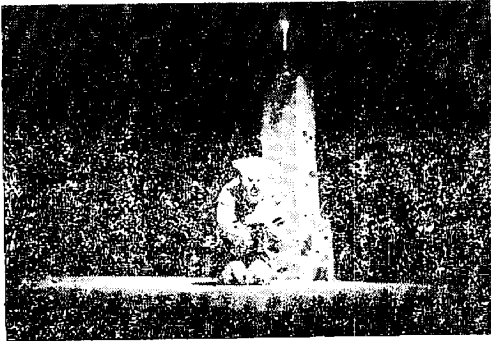
<あいさつ>

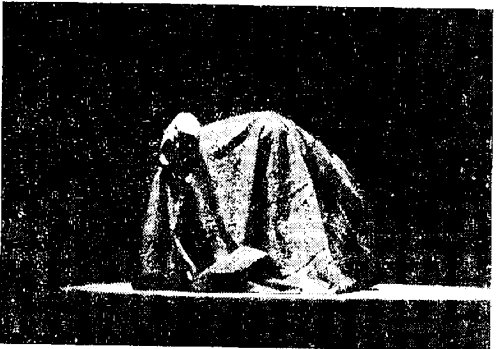
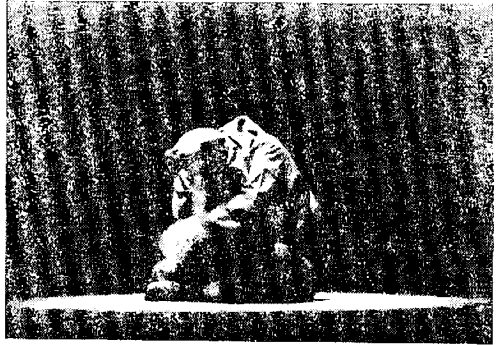
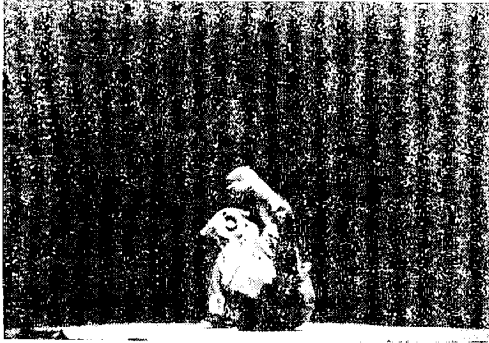
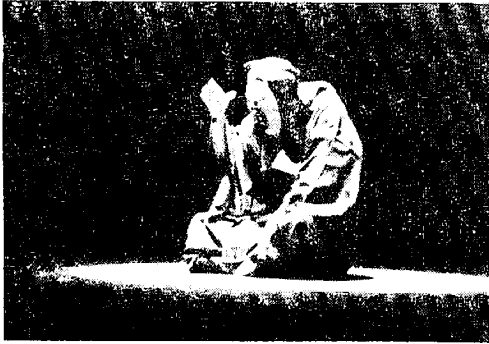


<草の学校>



<天の魚>





(撮影：藤松 昭)

砂田 明論

文明と文化レベルにおける魂と演劇的知

谷口 文章

「『ただの病気で死ぬものならば、魂は仏さんの引きとってやらずというけれど、ユーキ水銀で溶けてしもうた魂ちゅうもんは、誰が引きとってくるもんじゃろうか』

これは“生きる人形”と呼ばれるほど並はずれて美しく生れついて、激症水俣病により意識を奪いつくされた少女松永久美子さんの母親の述懐です。水俣病を文化のレベルでとらえようとするとき、この“行方不明の魂”という問いかけは重くて切実で、おいそれと答えられないが逃げることも又できない——そう思い定めた時、久美子さんたちを観音さまに見立てて、まっすぐ、そこへ向かって巡礼することしか自分にはできないと観念したのでした。しかもこのとき私は、同時に、旅芸人への本掛還りと、漂白の観進毛坊主との三重の役割を無意識の裡に背負ったのだ、と今にして思うのです。」（砂田 明『海よ母よ子どもらよ』樹心社）

上記の引用から、私たちは種々の問題提起とその方向づけを得ることができよう。

第一に“魂”の問題を物質文明と精神文化から分析する視点、第二に砂田氏の人生航路と内面の必然性および一人芝居「天の魚」の世界への示唆を見出せよう。第三に、ロゴスの知だけでなく、イメージ、シンボル、パフォーマンスの知について考えることができる。

第一に、魂の問題を、もし「魂という実体がユーキ水銀で溶けてしまった」と考えるなら、それは科学の立場である。魂や精神が物質から出来ていると考えるなら、すべてはそこで終止符をうつことになる。したがって、魂がこの世に迷うものではなく、肉体とともに焼かれて無に帰するだけすぎない。これは、物質文明のレベルにおける単純明快な処理方法だ。しかし、私たちの“思い”はそのように簡単なものではないであろう。プラトンのような「靈魂の不死」を信じるなら、よけいに不安が生じてくる。すなわち溶けた“行方不明の魂”は救われたのか、そうでないのか、誰が引きとってくれるのか。確かにこれは精神文化のレベルの問題である。哲学史上ふり返れば、近代合理主義の祖デカルトの考え方は、理性と情念の二元論によってその哲学体系を築き、精神的実体と物質的実体とを厳しく峻別した二元的思考に導くことになった。つまりイメージの世界、シンボリズムの世界、パフォーマンスの世界を排除してしまった。その結果、対象のもつ価値

的効力、機能的効用、感性的性質を切断することになった。理性による明るくて明晰な世界を理解したとしても、その実態は対象化され固く定化された死せる「もの」の世界にすぎない。私たちに今必要なのは、流動し、躍動する暗い側面をも含んだ生命の充実した「こと」の世界である。そのような世界を体験しようとする場合、死者の魂は、暗闇の中へと入っていくことも考慮に入れなければならない。それを知るには、理性的分析では十分ではない。理性の権限と限界を越えた世界は、概念だけではなく情念や信仰も含んだ実践の世界という他ないであろう。例えば、人々の“思い”を解き放つには、地獄に現前する仏という考え、つまり「あねさん。この空のやつこそは仏さんでござす」へと昇華されるか、また上村智子さんの母親のように「この子は、宝子でございます」と捉え返して、その人の心の中に永遠に生き続けている魂と一体化する他ないであろう（価値的効力）。また、砂田氏からはずされた仮面は、どのような名写真家が撮っても死んでいるが、一旦氏が身につけると、見開かれたままのうつろな眸、魂の叫びが聞こえる大きな口の仮面は、表情が変わらないにもかかわらず舞台では千変万化する（機能的効用）。さらに、智子さんと母親は人の会話といえないと思える「アー、アー、アー」という言葉で十分にコミュニケーション（交感）ができた（感性的性質）。このような世界が成立するためには、理性的ロゴスを無にすることによって内なる感性の自然な発露を待つしかないであろう。こうして文化レベルの次元から魂について考えるなら、肉体の死ですべて魂が減びてしまう文明レベルの考えが、どれほど浅薄なもので、現代人の精神を侵蝕しているかが理解できるであろう。そのようなレベルでは、「重くて切実で、おいそれと答えられないが、逃げることも又できない」「事柄を捉えることができな。ある「もの」への私たちの“思い”は、単に物質的なものとしてのみ把握される（物質文明のレベル）のではない。それが思いである限り、その思いを実感する「こと」の体験こそが、価値をもち、行動へと働きかけ、機能する。さらに、その対象がたとえ物体であろうと、非現実的なものでであろうと、過去の思い出であろうと、その思いの実感こそがそれについての魂を現前化させるのである（精神文化のレベル）。

私たちは、“行方不明の魂”を求める“思い”こそ、母親の心の中に久美子さんの魂が“仏”として生命の火を燃して現前し続けていると確信するのである。思いによって、人は時には取り乱し、錯乱することもあろう。「並みはづれて美しく生れついて」いたことが、いっそう悲しさと切なさを増幅させることであろう。「久美子の魂はどこへ行ってしまった？」と。しかし、だからこそ、久美子さんは未だに生き続け、この地獄の世に仏として観音として母親を苦しみから救い上げ、その人生を透明度の高いものへと導くのである。

第二に、砂田氏の演劇の世界への航路と内面の必然性を一瞥しよう。

文化的レベルで“行方不明の魂”をさがすために、囚われの身になった砂田氏は、「久美子さんたちを観音さまに見立てて、まっすぐ、そこへ向かって巡礼することしか自分にはできないと観念」する。文化を形成する情念の影響力の激しさと粘着力を感じる告白である。私たちは、なぜ氏の一人芝居「天の魚」の舞台が、あれほどまでの表現力で人々の魂を根底から揺さぶるのかを明らかにしたく思うのであるが、水俣へ移住することを“観念”したというこの言葉から一つのヒントが得られるであろう。観念には①仏陀の姿または真理を思い浮かべてよく考えること、②覚悟、③思考の対象となる意識の内容、④見解、などの意味がある。久美子さんや李太郎くんは“観音さま”や“仏さま”になることによって人々の心を浄化し、救いをもたらしたのであるが、人々の彼らへの思いは、まさに「仏の姿や真理を思い浮かべている」ことになろう。それを常住の体験とするためには、“巡礼”の漂白の旅に“旅芸人”と“勧進毛坊主”として「覚悟」して出かけねばならなかった。興味深いことに、私たちの人生は必ずしも意識や意志通りには展開せず、ある人との邂逅、ある書物や思想との触れ合いによって、今まで無意識であったものが突如内面の必然性として噴出して人生の行路を狂わせてしまうことが度々ある。それが砂田氏の場合、巡礼人、旅芸人、勧進毛坊主となって氏一人の中で“無意識の裡に”現実化したのだ。石牟礼道子の『苦海浄土』の“思い”の世界が彼の芸の世界に流れ込み、融合して夢幻能「天の魚」の芸術の土壌となる。氏は『苦海浄土』との出会いを通じて、水俣からすべてのものを、そしてこれまでの人生を照らし返すことで、「思考の対象となる意識の内容」を一つの「見解」として確立したのだらう。このように「観念」の分析から、氏の演劇の世界への導入が理解できよう。

第三に、「天の魚」を観劇することによって得られる、ロゴスとは異なった知について一考しておこう。私たちは、観念＝イデアの世界すなわちロゴスの知の世界のみに生活しているわけでもないことも自覚すべきである。ものごとをロゴスの知のように一義的に把握する場合、価値的効力、機能的効用、感性的性質など文化レベルの問題を切り落とすことになる。それを補い、多義的に全体のゲシュタルトを把握するためには、想像によるイメージの形成、それによって表象されたシンボルの解釈、またパフォーマンスによって知る行為的実践が必要となろう。すなわち、一義的なロゴスの知だけでなく、多義的なイメージの知、シンボルの知、パフォーマンスの知が要請される。

いうまでもなく、「天の魚」の芸術の世界はパフォーマンスの知によって理解する“演劇の知”である。暗い舞台に浮かぶ蠟燭の灯、背後の暗闇に蠢めく影、そこでの仮面の躍動などは、イメージを通じてこそ生命力を得るのである。また、蠟燭、仮面、霊、影、神、猫などは無意識の世界のシンボルであろう。観客は、舞台と一体となってその都度のパフォーマンスに魅惑され、同一化し、魂を共有すること

でイメージやシンボルの知をいっそう深め、それゆえ心が満たされ充足されるのを感じ、感動する。

このような氏の芸術の世界は、文明や科学によっては解決できない文化や魂の問題に対して、イメージとシンボルに支えられたパフォーマンスの知を通して答え、カタルシスを与えてくれるのである。



JAPAN JUNG CLUB NEWSLETTER

✽SPRING✽

編集 日本ユングクラブ事務局 東京都大田区山王1-37-3山王教育研究所内 ☎03-775-8155

1989・3・15 No.21

深層心理研究会

第5回公開講座報告

谷口 文章

昭和63年12月23日（金）の講演会、および24日（土）の講演会について報告致します。講演会は、砂田明・一人芝居「現代夢幻能—仮面（ベルソナ）のカタルシス—」でした。そして、講演会では「私の演劇論」について語っていただきました。研究会会員の感想文をもってその報告としたいと思います。

（甲南大学・研究会世話役）

（ニューズレターNo.21より転載）

◎公演会：夢幻能回想（P.82）
◎講演会：演劇と言霊（P.87）
は、この号のニューズレターより転載したものです。

◎公演会：夢幻能回想

甲南大学 理学部 三回生 西村 由美

12月23日の夜、神戸文化小ホールにおいて上演された「草の学校」「天の魚（いを）」「勸進帳」の三部劇の中から、絶大な感銘を受けた「天の魚」について、その感想を綴ってみたく思います。

黒幕に覆われた舞台は、静寂の中から突然激しい楽音とともに観る者に迫り、すべてのものを暗黒の世界へと誘う——まどろむような幽かな明かりを灯す燭台が一つ置かれただけの小さな暗い空間は、あらゆる雑多なものを削り去った極限の世界のようであり、観る者をしてそのまなうらに様々の情景を写しだし、それと同時に、限りなく広がる垂直空間を感じさせる。

うっすらと青い光の中に冥界が浮かび、黒衣に異様なまでに大きく、口をひらいた仮面をつけた江津野老人の霊が現れる。そのあまりに大きな口は、叫んでいるのか、怒り嘆いているのか……心はしめつけられるようにしんしんと痛み、私の視線は吸い寄せられるように仮面を見つめ続けた。

語り部である猿郷の女が、水俣百間港で漁をして生計をたてている江津野家を訪ねる。息子の清人は一目でそれと知れる水俣病であり、孫の奎太郎は五体かなわぬ胎児性患者であり、江津野老自身やその妻の上にも、水俣病は色濃く影をおとしていた。

「お前やそげん体して生まれてきたが、魂だけは、そこらわたりの子どもとくらぶれば、天と地のごつ、お前の魂の方がずっと深かわい。……泣くな奎。爺やんの方が泣こごたるがね。」立つことも食べることも話すことさえもかなわぬ身で、奎太郎少年は何を見つめ聴いていたのだろうか。生とも死ともいえぬところに在り、煩惱などつゆ知らぬその透明な魂は、言葉をはるかに越えて人の心と結びつくような、限りなく清らかで、優しい存在ではないだろうか。「この、奎のやつこそは仏さんでござす。」江津野老のこの言葉は、私たちすべての心に響く。あらゆる悲しみも嘆きも御身にひきうけ宿しながらも、笑みを浮かべる奎太郎は、時間にも空間にも支配されない絶対的な存在であり、私たちはその悲しい存在を通して、真実を知るのである。

江津野老が「こるがあるために生きとる世の中でござす。」というほど好きな焼酎を呑み、その酔いととも場面展開も深まりをみせる。酒による虚いで印象が不透明になり、そのためかえって躍動感が増す。

「……奎の生まれたところは猫やつの、くりんくりんち、貫うてきても貫うてきても狂うて、舞うて、……ああ、なんびきどま死にましたろかい……」と言い終わると、突如、つんぎくような狂燥な音と共に、足元からのぎらぎらした白光の中で、老人はあえぎながら叫びもだえる。その異様に大きな影が黒幕や天井にうずまき、死霊の面影はもうすっかり狂い猫のそれに变化し、この世の地獄を思わせる情景

が現れる。あまりに素早い場面転換のために、拒絶したくなるようなその情景から目をそむけることを許されない。私たちは、このような非日常的といわれるような無意識界の体験を通してはじめて真実の世界に生きたことになるのかもしれない。

「天のくれらすもんをただで、わが要ると思うしことってその日を暮らす。これより以上の栄華のどけえいけばあろうかい。」これは、現代人の多くが忘れて、最も本来的な人間の在り方ではないだろうか。そこでは、自然との対話を通して、すでに人は自然の一部である。天の恵みを受け、生きる喜び・悲しみを抱きこむその存在は、私の中に憂いともあこがれともつかぬ想いを呼び醒ます。

着る者を失った黒衣の上にぼつりと置かれた死霊の面は、ただ中空の一点をみつめ、その想いを募らせつつ、静寂と暗黒の世界へと立ちもどる。観る者をも包みこんで広がるこの幽玄の世界は、無機的なレンズの前にはその真の姿をとどめない。それは、クロノス的な時間の中では、直ちにその姿をくらまし、それていて、魂の周辺に見え隠れするある確かなイメージとして、漂っているのかもしれない。

(日本ユングクラブ・ニュースレター NO.21より転載)

仮面(ペルソナ)のカタルシス

甲南大学 法学部 三回生 辻 啓之

暗闇の中に浮かぶ舞台の上で、砂田 明氏が舞い語っておられる。その情景を見たとき、私の胸に熱い感動が込み上げてきました。

主催スタッフの一人として受付などの作業に追われ、ゆっくり芝居を見ることができず、劇場を出たり入ったりして覗いていた私に自分でも信じられないほどの感動が押し寄せたのは、《現代夢幻能・仮面(ペルソナ)のカタルシス》『天の魚(いを)』の舞台の後半、老漁夫江津野老が美しかった海で漁をした頃を回想する場面でした。

「あねさん。魚(いを)は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんをただで、わが要ると思うしことってその日を暮らす。これより以上の栄華のどけえいけばあろうかい。」

静まり返った劇場に美しい笛の音が流れ、あたたかな照明のなかで仮面の表情は和らいでいく。彼はふわりと立ち上がると、ゆっくりと舞いながら語っていました。

目の前に展開されるその夢とも幻ともつかぬ世界は、観る者の心の奥底までも飲み込んでしまい、今なお水俣病の悲劇の渦中にある老漁

夫が楽しげに話すその言葉の影にある悲哀を痛いほど感じさせました。と同時に、病みし体から溢れ出たその振る舞いは、悲しみや苦しみを乗り越えてきた力強い心そのものであり、この病理的社会を生きていく者の上に希望の光を放っていました。

社会問題を普遍的な形で捕らえて取り組んでいくためには、目先の事象に囚われることなく、それらの問題を己の中に統合し、乗り越えていくことが一つの大きなテーマとなると思われます。そういったテーマを克服する為の試みとして私たちは、大学での講義において哲学を中心とする「理論の知」を、深層心理研究会においてフロイト・ユングを中心に「深層の知」を、研修旅行において環境汚染・破壊等の社会問題を中心に「実践の知」をそれぞれ学んできました。正直なところ、学び始めてみると、理論の山は遥か高く、深層の谷は果てしなく深く、実践の壁はとてつもなく厚く感じられました。この一年のあいだ、ただ諦めずに山のふもとをさまよひ、谷への入り口を探し、壁とにらめっこするのが精一杯でした。そして昨年暮れ、「焦っても仕方がないから、出来ることからやっぺいこう」という気持ちで、この公演会に臨んでいたのです。

そんな私たちを飲み込んだ夢幻能の世界は、相対的な悩みなどフツと消しとばしてしまう主客合一の絶対的な世界でした。その中に引き込まれた者は、時間一空間による制約を越えて一瞬の内に感情的なもの、思想的なもの、感覚的なもの、直観的なものが様々に入り混じった不思議な体験をすることによって、非常に大きなカタルシス効果を味わいました。何故だか分かりませんが「今日までしてきたことが無駄でなかったような」「今日まで生きてきたことが素晴らしいことのような」そんな思いが込み上げてきたのです。今もそれを言葉にして表現しきることは出来ませんが「哀しみや喜び」「弱さや強さ」「絶望や希望」といったものが、あのときの情景とともに体のどこかに刻み込まれたようで、時として鮮明に思い出されます。

もちろんこの体験一つで、先に述べたテーマが克服されたわけではありません。しかしこれが一つのステップであり、次の段階への足掛かりになるものだと思じて、また出来ることから一歩ずつ進んで行こうと思います。

公演終了後、私たちはそれぞれ様々の言葉にならない想いを胸に抱いて顔をあわせました。何も言わなくても互いに心が通じ合い、喜びと自信を照れながらも確認しあっている。そんな視線を楽しみながら、みんな再び持ち場へ戻り、いつに無く充実したあとかたづけに没頭していました。

暗闇の幻影
甲南大学 文学部 一回生 井垣 博美

『草の学校』が終わり、休憩をはさんで次の演題『天の魚』が始まる。休憩の間、ロビーで本の販売をしていたため、私は他の観客よりも少し遅れて会場に入った。そこはすでに照明が落とされていて、暗闇の中、舞台の上では、全身を黒で覆い、大きく口を開いた奇妙な仮面をつけた江津野老が中央の青白い光の中に立って、蠟燭に灯をつけようとしていた。黒衣がその動作に合わせて灯をとると、わずかな照明と蠟燭の灯の他は何もない薄闇の中で江津野老が語り始めた。

九竜権現を見せてもらいたいというあねさんに、江津野老は神棚から何かを取り出すようにして向き直り、手の上の包みにふっと息を吹きかけ、それを開いた。その動きで、光に照らし出された内なる闇から光の外の世界へと異空間が解き放たれたかのように、舞台の上に夢幻の世界が現れた。「こるが九竜権現さまで、御神体は竜のうろこでござす。」とあねさんに包みの中のものを手渡して、家の守り神であるその竜神の話をする江津野老を見ているうちに、私は江津野老が仮面をつけていることも、その仮面のおよそ人らしくない表情も不自然でないように思えてくる。それどころか、光の外の世界の中に清人やばあやんが見えるような気さえした。

江津野老は二、三步中央に進み出て正面を向いて座り、ばあやんに持ってこさせた焼酎を飲みながら家族のことを語る。息子の嫁のさち子のこと、息子清人のこと、孫の壺太郎のこと……水俣病は家族、親族の一人一人に暗い影を落としていた……中でも、死を目前にした江津野老が、自分で自分の体を扱いきれない胎児性水俣病の孫の暗い将来を思い、「壺のほうに早よお迎えのきてくれらした方が有り難かこつてございますと。」と言った言葉には、胸をしめつけられるような思いがした。そして、その江津野老の焼酎を飲む姿は、やり場のない思いをお酒と一緒に飲み下しているようで哀しかった。

話が進むにつれ、私の視点は次第に江津野老の身体の動きから、顔一仮面の表情へと移っていった。どんな特定の表情も持たない仮面は、そのせつない語りや巧みな動きの中で、その裏に隠された顔の筋肉の動きを映しとったかのように生きた表情を生み出していた。演じる者の思いだけにとどまらず、観る者の思いをも反映させて、あらゆる表情をつきつめた“無”の表情は、暗闇の舞台の上で“無”を“有”へと転じてゆく。しかし、その表情は人間のもののようで、決して人間のものではない。むしろ人間という枠組みを越えた、生けるもの全てのもののようにだった。あるいは死せるものそれだったのかもしれない。そして、仮面は砂田氏という動く肢体を得て、より強烈に私を魅きつけていった。

突然恐ろしい音が鳴り響き、ライトが逆転した。足元からのライト

に照らされて江津野老は狂い舞い、背後に苦しみ悶える猫の影を映し出す。その影はまさに狂気そのものだった。その狂気の世界に引き込まれるような、自分の中にある狂気が引きずり出されるような感覚に襲われて、ほんの僅かな時間でしかなかったにもかかわらず、私は背筋が寒くなった。再びライトが逆転し、橙色の光の下で膝をついて湯呑に酒を注ぐと、今度は江津野老の湯呑を持つ手が痙攣しはじめた。震える手をもう片方の手で押さえながらようやく湯呑を口にやると、会場は波を打ったように静まり返り、やがて聞こえてきた静かな琵琶の音とともに美しい水俣の海が舞台を覆っていった。江津野老は記憶の中を初夏の夜の海へと漕ぎ出してゆく。

ふと気が付くと、会場に広がる闇はいつの間にか濃くなっていて、江津野老が幻影のように浮かび上がっていた。その時、あねさんの影は私と重なって、私自身がこの夢幻能の中に入り込んでしまったような気がした。風ぎ渡る海に舟を浮かべ、取れたての魚でかかさまと盃をかわす。「あねさん、魚は天のくれらすもんでござす。」江津野老はふわりと立ち上がり、舞いをさす。金色の光が差し込み、朝日を拝んで舞いを納めると、陶然とした表情でこくりこくりと頭を振り始め、しだいに眠りに落ちていった。しかし、風が顔に触れたのか、ふいに頭を上げて、「帆ば上げろ」と言うと、風に乗って海の上を港へと帰っていった。

水俣という土地の、貧しい漁民の、悲しく皮肉な思い出を、残りわずかな焼酎は老人にゆるやかに思い起こさせる。遠い昔に思いを馳せながら眠りについた江津野老は、夢の中でこれまでとは打って変わった明るいハイヤー節を躍りだす。音楽が途切れ、暗転した舞台の闇の中に、あの大きく口を開いた仮面だけが浮かび上がった。しかし、それもやがて闇に溶けてしまうと、私は他の観客より一足先に会場を出た。再びロビーで本の販売に入ったが、自分の中のいろいろな感情が脹れ上がり、体が小刻みに震えるのを抑えることができなかった。

◎講演会：演劇と言霊

甲南大学 文学部 四回生 天野 雅夫

……「あいうえお」「いうえおあ」「うえおあい」。突然、会場に多数の人間の大声が響きわたる。砂田氏の熟練された声の技に圧倒されながら、我々はその深淵の世界へ確実に一步ずつ入り込んで行く。すでに各人の呼吸のリズムは一致し、共有された場はつながれた紐のようにそれぞれを結び付け、平凡な教室の一部分に異空間が出現する。

24日（土）の昼、甲南大学における講演会で、最初に語られたのは氏のここに至るまでの経歴であった。自分の意志に反して神戸の高等商船学校に進み、海王丸の甲板で迎えた戦後のこと、戦後の混乱した時期のこと、その頃大阪湾では新鮮な魚を好きなだけとって食べることが出来たこと、そして演劇をやろうと決意したことなどを熱い口調で話された。

次に、本題である演劇論になる。仕草やゼスチャーよりも、言葉やセリフに重きをおく氏独特の演劇論が展開される。現代演劇の視覚重視の現状を批判し、「見る」文化の肥大を警告する。氏が求めているもの、それは、古代ギリシャの野外劇場での演劇の形態「コロス」。ここでは、言霊によって語られるセリフ、そろえられたイントネーション、タイミング、リズム、呼吸。すべては、生命に最も関係深いものであり、それゆえ言語もこれらの要素をもってはじめて生きることが出来る。そしてこれらの土台があって、初めて視覚的要素つまり仮面や衣装が、その存在の意味を持つ。演劇における聴覚的要素は、非日常的なデフォルメされたものであるといえるが、この真の力が発揮されたとき想像力は無限の広がりを見せ、観客はその演劇の世界の中に引き込まれていく。それによって本来無表情であるはずの仮面が、本当の老人の表情以上の多彩な表情を感じさせるのである。

その聴覚的要素の大部分はセリフであり、これにおいて重要な要素は抑揚と強弱と子音、母音の関係である。一言で日本語といっても、各地方にはそれぞれのなまりがあり、そのなまりによって無数の方言が生まれてくる。そのなかで大部分のものは、西型と東型にわかれる。本来西型つまり関西方言出身である氏は俳優養成所時代、演劇表現においてこのセリフに関連する問題をなまりの克服によって体得し、その重要性を認識する。このような聴覚的諸要素の重要視は、理論面においても現実の面においても氏の演劇を支えるものであろう。そして氏の演劇は、石牟礼道子の『苦海浄土』と有機的に結合することによって深まっていく。セリフが、なまりが、そして仕草が、完全に我がものとならなければ、その演劇は完全なものにならない。氏は、真実の意味における『苦海浄土』という演劇の完成を目指して、水俣移住を決意したと語る。苦海浄土の魂の完成こそが、氏の訴えであり、そして人生であったといえるだろう。

このように氏の演劇論は、理論だけにとどまらず、演劇に生きた氏の人生や生きざまをかいま見させ、我々に深い感銘を与えながら終わった。講演会の最後、参加者と一体になって演じられた劇の感覚は、我々の心の中に永遠に残ることであろう。

(日本ユングクラブ・ニューズレター NO.21より転載)

砂田 明氏の演劇論

甲南大学 文学部 四回生 秋山 美紀

1988年12月24日、本校10号館において第5回公開講座砂田 明氏による『私の演劇論』の講演が行われた。演劇を初めて40年という氏が、水俣に至るまでの過程を感情を交えながら語られた。

氏が生まれたのは世界大不況のあった昭和6年で、日本は間もなく昭和の15年戦争に入る軍国主義時代だった。その翌年水俣ではチッソによる毒の放流が始まっている。その時期に生まれ育ってきた氏は高等商船神戸分校機関科に入り、そこで敗戦を迎え、氏の中で本来あった役者になりたいという欲求が、高等商船機関学校でライセンスを取った時、突如湧き上がってきた。そのことがきっかけで、役者の道が開けたのだ。

朝鮮戦争を境にして日本の経済が、人々の生活が豊かになり、また氏も芝居に充実したものを感じ始めていたのだろう。しかし、時代は外面の豊かさばかりを追求し、内面の豊かさ、心の豊かさを差し置いてのものだった。当時の若者は、自分達の未来をこんな時代に預けていいのかという問い直しを強いられた。さらに氏の中にも「これでいいのだろうか」という世間に対する疑問が反すうされて、氏は自分の生きる道をもう一度考え直された。そういう時に、石牟礼道子著の『苦海浄土』に出会い、それによって、心が突き動かされた。

氏は戦後自分の生きてきた方向、演劇もこれではいけないと自覚した。さらに石牟礼道子の文章から、人が築いた文明の盛衰の筋道を知り、また、水俣の悲劇と石牟礼文学の世界とが重なり、氏の芝居ができたのである。

今の文明は視覚に片寄り過ぎて逆に見えなくなっていくものが多い。つまり、人の心を開くのは言霊の世界であり、それは単なる言語と視覚からではなくて役者という肉体を使って肉声化され、それを聞き手が響心するという所で現れる演劇が必要ではないのかと思われた。そしてその劇が本当に焦点を結ぶのは、聞いている人々の心の中で聴覚を通してなされた時だという気がする。言葉の広がる劇場は無限であって個人差はあるとして過去に体験した色々な事を材料にし

て無限の宇宙を思い描くことが出来る。一人一人の想像力が最大限に発揮でき、主体性がもっとも広がる世界は演劇だと思われる。氏はそのことを石牟礼文学と水俣を介してはつきりと分かったに違いない。そして、水俣の魂の言葉を表現出来るようになるためにはそこに住んで、もう一度水俣の意味を考えようと、東京での演劇活動を自ら断ち切った。

氏は水俣を文化的な大事件として捉らえている。この大事件を自分の魂の共鳴音を添えて人々に伝えたいと思い水俣に移り住んだ。基本的には水俣が氏にとって素晴らしい所であり、ここで生きたいという欲求と、将来の自分の仕事と決めた演劇を水俣という鑪で研いで、もう一度役者として再生出来るのかどうかということに賭けてみた。

始めは無我夢中でただ誠心誠意力一杯やるしかなかったけれども、水俣ひとり芝居が500回近くなった最近では舞台に跳ね返ってくる観客の呼吸に耳を傾けながらいくらか出来るような気がしていると語られて、お得意の場面である演劇教室を始められた。



砂田 明公演会の運営を終えて

甲南大学 法学部 四回生 山下 智実

私たちは昨年の夏季合宿で、一人芝居を通して様々な社会問題を訴え続けられる砂田 明氏を、熊本県の水俣市に訪ねました。そこで参加者は砂田氏から水俣病の現状や、さらにその奥にある社会全体の問題、また人間としての生き方の問題などを氏の体験や芝居を通じて共に体験することが出来ました。その中で、砂田氏の一人芝居をもう一度見たい、そしてもっとたくさんの人に見てもらいたい、という気持ちがゼミ生の中から生まれ、昨年12月23日に神戸のシーガルホールで公演会を実現する運びとなりました。

とはいうものの、砂田氏のようなプロの役者さんを御招きして、大きなホールを借りて公演を主催するというようなごとは、皆未経験の者ばかりで色々大変でした。まず、谷口先生と御相談して、砂田氏と連絡をとって頂き、日時が決まった上で、会場探しとなりました。会場は12月というイベントの多い時期だったため、どのホールも詰まっていてなかなか見つからなかったのですが、比較的甲南大学に近いシーガルホールが見つかったことは本当に幸運だったと思います。会場が決まってからは、たくさんの人々に来て頂くためにポスター、チラシ、チケット、パンフレット等の作成に忙しい日々が続きました。ポスター作りはA君を中心に、チラシ、チケット、パンフレットの方にはSさん、Nさん、T君を中心に、ゼミの終了後などに悪戦苦闘しながらもゼミ生がよく協力してくれたので、楽しく作業を進めることが出来ました。（その際、砂田氏には大切な写真を快く使わせて頂き誠にありがとうございました。）

ポスター等が出来上がったのが10月の中旬で、それから観客動員を始めたのです。最初は、“砂田氏のような有名な人物は、すぐにお客さんが集まる”とか、“砂田氏の一人芝居には必見の価値があるので、友人などを誘えば必ず見に来てくれる”というような意見が多かったため観客数についてはあまり心配していませんでした。しかし、12月23日という年末の忙しい時期だったため、このような期待は裏切られてしまいました。そのような中で、食品共同購入グループの人達にポスターを貼ってくれるようお願いしに行くと、他のグループを紹介してくれたり、チケットを預かってくれたりと大変親切にして頂きました。また、どこに行っても砂田氏の一人芝居は有名で1～2回と舞台を鑑賞したという人がたくさんおられ、やはり氏の400回を越える全国公演というのは、凄いものだと感じました。

そうこうしているうちに、学内で売れ行きの芳しくなかったチケットが徐々に売れてゆきました。というのは、夏季合宿で水俣へ行ったときに撮ったビデオのまとめたものを谷口先生が授業で使われたのでした。このビデオを見て砂田氏の人柄や芝居に学生が興味を覚えたも

のが多かったようです。また、朝日新聞に砂田 明氏公演会のことが掲載され、これにより一般の人からもたくさんの問い合わせや、申し込みを頂きました。そして、最初は観客数が少なかったらどうしようかと心配していた不安が、今度は会場に入れない人がいたらどうしようかという嬉しい悲鳴に変わっていきました。

いよいよ当日、開演前からたくさんの方が集まって下さり、谷口先生のごあいさつの後、砂田 明氏公演会は約二時間にわたって行われました。会場はもちろん満員で立ち見の人もあるくらいでした。そして二時間後、観客は砂田氏の演技に胸を打たれながらの終演となりました。その反響は公演終了後に砂田氏が立たれた勸進にも過去最高額のカンパというかたちで現れました。今回、このように様々な経験をできたことはゼミ生一人一人にとって貴重な体験になったことでしょう。この体験をもっと各人が深めることが、この公演を本当に価値あるものにすると思います。

最後になりましたが、公演会を快く引き受けて下さった砂田 明氏、エミ子夫人、そしてスポンサーの村島泰雄氏、その他この公演に協力して下さった大勢の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。また、谷口先生には公演会開催に際しまして、全面的にご協力ならびにご指導を頂きまして誠にありがとうございました。

公演会運営委員：山下 智実
阪田 和子



砂田先生へ
 先生のお芝居は
 感動的でした。『晴れ男』の砂田先生へ
 今後の俳優の活躍
 を祈ります。砂田先生
 坂田 幸子

砂田先生へ
 飾らないう素朴な舞台から生まれる
 砂田先生の「ハリー」はすばらしいと思います。
 高垣 美成子

砂田先生へ
 先生のお芝居は
 感動的でした。『晴れ男』の砂田先生へ
 今後の俳優の活躍
 を祈ります。砂田先生
 坂田 幸子

数日前お話を伺ったことが思い出され、感謝しています。
 あの素晴らしい舞台をもう一度見たいと手紙が一通届きました。お返しができず申し訳ないです。お返しができず申し訳ないです。

いつまでも可憐しい
 舞台を続けて下さい。
 そして見る者に感動を
 与え続けて下さい。

大江正俊

砂田明先生へ 現代夢幻能 仮面のカタルシス

1988. 12. 23. 24

仮面を通じ、生と死、そして平和と戦いを
 見詰めるふたりの旅。芝居に、深く感動
 致しました。
 この世界の人類の「命のつらかり」を見詰めて
 下さい。

甲南大学 倉口文章

身を履き尽して示させた熱い想い
 ありがとうございます
 これからの御一層の活躍を
 祈ります。

深谷 昌生

感動の舞台
 ありがとうございます。
 岡田 誠二

可憐しい舞台
 ありがとうございます。
 いろいろ有るこが
 好きです。西田 彩子

いろいろと別れようと思った。
 此の世に残って下さい。
 大石 陽香

かっこいい
 舞台は見た人
 校の人に何かを
 与えてくれたらいい
 かな。ありがとうございます。
 いまは、

復本修一

砂田先生のお芝居は
 とても心に残りました。
 ありがとうございます。

聞くことか五の演劇に
 先生が言われたことが昨日
 の公演の感じがよくわかりま
 した。ありがとうございます。
 かな。ありがとうございます。

心よく公演をみてまいりました。
 ありがとうございます。
 ありがとうございます。
 ありがとうございます。
 ありがとうございます。
 ありがとうございます。

IV

学園生活の一風景

新入生に贈る言葉

若き人々へ

甲南大学 文学部 助教授 谷口 文章

もし、身体が突然不自由になり、わずかに口が動くだけとなったなら、私たちはどのように感じるだろうか。そのような人が書いた絵文集からの詩を紹介しよう。

〈生と死〉：おだまきの絵より
いのちが一番大切だと
思っていたころ
生きるのが苦しかった
いのちより大切なものが
あると知った日
生きているのが
嬉しかった

(星野富弘『鈴の鳴る道』)

ルソーは、人間は二度生まれるという。一度目は存在するために、二度目は理性の目覚めの時に。さらに、人間は二度生まれるだけでなく、フロイトは二度死ぬという。一度目は母胎からこの世に出て肺呼吸する時に、二度目は生命体の死の時に。このように考えると、生と死は別々なものではなく、同じものの表と裏なのであろう。この世に生を授かる時の産声は、喜びと苦しみの叫びなのだ。そして、もの心がつき、理性が目覚め、生の意味を考える時、ふと死の予感がする。それは思春期の苛立ち、青年期の未来への不安となって現れる。真実の生や自己を求める時には、深刻な生を経験するためである。充実した生を生き抜いてきた人は、生の裏である生命体の死を乗り越える「生」を体験してきたといえよう。それは、喜びである。

しかし、「いのちより大切なもの」とは一体何だろう。

<挫折>：はなきりんの絵より
動ける人が
動かないているのには
忍耐が必要だ
私のように動けないものが
動かないているのに
忍耐など必要だろうか
そう気づいた時
私の体をギリギリに縛りつけていた
忍耐という棘のはえた縄が
“フッ”と解けたような気がした

(同上『風の旅』)

キルケゴールによると、絶望とは「死に至る病」であるという。しかし、挫折や絶望のない人生などあるのだろうか。「いのちより大切なもの」を求めて外へとさまよう時、結局は挫折しか残らない。けれど、目的は何であれ、自分にとって大切な「もの」を求める“過程”こそ、いのちより大切な「こと」を体験しているのだろう。

「忍耐」という観念が支配する限り、絶望がつきまとう。「忍耐している」体験は、あとから辛いと感じるもので、その過程はかえって充実感で満たされているはずだ。その時、人は挫折から解放されて自由なのだ。

<自由>：たんぼぼの絵より
いつだったか
きみたちが空をとんで行くのを見たよ
風に吹かれて
ただ一つのものを持って
旅する姿が
うれしくてならなかったよ
人間だってどうしても必要なものは
ただ一つ
私も余分なものを捨てれば
空がとべるような気がしたよ

(同上)

カントは、人間の尊厳は道徳法則に従う自由意志をもっていることだという。自らの生と死を引き受け、挫折しながらも精神が自由であるのは理想的だ。「大切なもの」を外ではなく内に求める時、絶望は希望へと反転する。すでに大切なものをもっていたことに気づくからだ。それは、愛である。

私たちは、あまりにも余分なものをもちすぎている。一つの可能性、一つの体験、それで十分だ。そのように気づけば、愛に支えられて精神は自由に大空を飛翔しているだろう。

<愛>：しょうぶの絵より
黒い土に根を張り
どぶ水を吸って
なぜきれいに咲けるのだろう
私は
大ぜいの人の愛の中にいて
なぜみにくいことばかり
考えるのだろう

(同上)

パスカルは、人がこの世にあるのは愛するためにほかならないという。生の中の死、充実の中の挫折、自由の中の束縛、そのような呪縛から、人を解放し包むものは愛なのだ。愛とは、恋愛のような同一化する力だけではなく、さらに大きく「ゆるし」であるといえまいか。どれほど深く広く愛しているかは、どれほどその人をゆるすかということなのかも知れない。他人に対しても自分に対しても。

愛と憎を超えた「いのちより大切な愛」、それは人を拘束するものではなく、人生における無償の見護りであるのであろう。

('89年4月5日発行 学生部便りNo.105に掲載)

— 新入生に— 入門セミナー講演 —

谷口 文章

御入学おめでとうございます。いよいよ大学生です。自由な自主的な時間のもてる時期となりました。ただ、この「おめでとう」は、心から本学に入学したい人に対してだけ素直な気持ちで贈ることができます。もし、イヤイヤ、仕方がないから本学に入学したということであれば、もう一度大学とは何なのかを考えて頂き、価値転換をはかってもらわねばなりません。というのも、「～大学(卒)」という肩書きは、これから四年間だけでなく一生ついてまわるからです。それに耐えられない人は、今すぐに、退学して納得のいく大学を受け直すべきでしょう。社会における学歴尊重の問題は、実は、表面的なことにすぎません。大切なことは、その人がどうであるか、ということです。受験勉強のような記憶や暗記力がよい、与えられたことのみでの処理能力があるということでは、豊かな人生を過ごすことはできないでしょう。人間にとっては、表面的な価値基準による自己中心的生き方ほど孤独な生き方はないからです。人間の評価には記憶力や学校の成績よりも、むしろ、どれほど暖かい人か、真面目か、持続力や根気があるか、誠実であるか、思いやりがあるか、ということ尺度にすべきだ

と思います。

もし、この中にそのようなコンプレックスをもっている人がおられるなら、次のように考え直せばどうでしょうか。足を折ったとします。その時は「イタイ」と感じるでしょう。それから病院に入院している時はどう感じますか。そうです。「早く歩きたい」と思うでしょう。それから治れば、「自分の足で歩ける喜びを感じる」はずです。その時自覚して頂きたいことは、今まで当たり前であった足が、再び健康に動き歩けるようになった「ありがたさ」つまり「有り難さ」なのです。“有るのが難しい”ということ、したがって“ありがたい”という感謝の気持ちが生じるということです。自分が痛みやコンプレックスをもつということは、自己を見つめる機会が生じると同時に、相手がそのような立場にある時、その人をおもいやる優しい心をもてるということなのです。つらさや悩みを克服してこそ自己を確立し、他の人に優しくなれ、人生の小さな出来事にも日々感動できましょう。

その意味で、本学の学生となったからこそ、次の新しい段階に進み「自己教育」をして下さい。生まれてからの躰も含めて高校までの勉強は、読んで字の如く「強(し)いて勉(つと)める」だったわけです。つまり勉強ということに何ら主体的に意味を見いだすことなく、それは他律的に与えられ、消化するためだけの「緊張」の連続だったわけです。それでは新しいものを創造することはできません。大学では「リラックス」して、自分の研究に対して主体的にそして自主的に意味を見出すことです。そのような自律的な精神の構えを、この四年間で培うことが大切です。

以上のようなことから、四年間の主体的な学生生活と、その経過での豊かな人格陶冶は、灰色の硬化した時間・空間を、生きられた時間・空間とすることでしょう。今までの均質、均等の時間・空間は、個性に応じた、意味深い、濃淡のある生き生きとした時間・空間となるでしょう。つまり「生きられた時間」とは、学問に、人間関係に、クラブに夢中になっている時間であり、何ものにも替えがたい時間でしょう。「生きられた空間」とは、本学における新しい世界、場所として自由に活躍できる場でしょう。そのような個性的で独自の時間・空間こそ、充実した学生生活を支えるものといえましょう。

このような背景の下に、自律的な自己教育とともに深みのある豊かな人格を陶冶していったく思います。

(甲南大学生生活共同組合主催、於：271号教室、1988年4月1日)

谷口ゼミ学園祭模擬店出店記

大江 正俊・井垣 博美

昭和63年11月19日から21日までの3日間、我が谷口ゼミでは甲南大学学園祭『摂津祭』において模擬店「谷ピーのやきいも」を出店した。学園祭が行われる約2ヶ月前、模擬店出店の公告があった後で、ゼミで模擬店を出してみようという話が持ち上がった。みんなの意見は賛否両論であったが、お祭り好きの人たちが中心になって、とにかく出してみるようになった。やると決まると何の店にするか、多くの候補があがったが、人気・コスト・保存・準備・当日の手間などについて“厳格”に検討した結果、日本の伝統芸術「やきいも」に決定した。専門科目に哲学を掲げる我がゼミとしては、伝統の中にも新しいものを取り入れようと、様々なトッピング出来そうなものを持ち寄っての試食会を開いた。あんこ、ジャム、チョコレート、マヨネーズ、バター、醤油、塩、砂糖、他、それらを混ぜ合わせたものも登場して、かなり恐ろしい光景が展開された。バター醤油などは、なかなか好評を博したが、そのままの味にはかなわないことに気付き、本番では小細工は止めることにした。

実際の作業は店長に就任したOを先頭に、週一回の会議に出席することから始まった。その会議は種々の公約、書類提出の為のもので面倒なことだったが、とりあえず出店場所のくじ引きまでこぎつけた。くじ引きには運の強いIが出て、見事に他を出し抜き“素晴らしい”領地を取ってきた。皆はそれで調子づき、店の制作にかかった。「箱型がいい」とか「屋根が欲しい」とか色々な意見が出た後、結局「とにかく簡単に作れるのがいい」という結論になった。店作りは男性陣が大工仕事をして、女性陣のTさん、Iさんがそれぞれ“のれん”と“のぼり”を作ってきてくれた。実は「谷ピーのやきいも」なる店名はTさんがいきなり“のれん”にそう書いてきたことで決まったのである。また、理学部のO君がラッピング用に英字新聞を持ってきてくれ、芋を焼く釜はOBのI先輩とAさんが貸して下さった。肝心の芋はIの知り合いの方から「特に甘くておいしいのを」安く譲ってもらった。こういった準備段階での数々の苦心が成功への大きなステップとなった。協力してくれたゼミ生諸君に多謝。

さて、当日である。学祭初日は以前にも経験のあるYさんが「持ったときの堅さで分かる」という職人芸で芋を焼き、女性に売るのが特にうまいOさんが「おばちゃん買ってえな」と大声でたたき売るといふ自他ともに認める“黄金コンビ”の活躍で、予想を遥かに上回る売上を見せた。閉店後、芋を数えた結果「これではとても足りない」といふ嬉しい悲鳴と共に、Aさんに車で追加分の買い出しに走ってもらった。

2日目は谷口先生御夫妻や、森先生も来て下さり、初日にも増して

の大盛況となった。売り子を経験した女性陣は、初めのうちは照れ臭そうにうろうろしていたものの、慣れてくると大きな声で「おいしい焼き芋いかがですかー」と自ら試食をしながら楽しく売っていた。

最終日は、みんな晩の打ち上げコンパに気をとられながらも、もう既に仕事は板についており、見事な商売人ぶりてどんどん売上を伸ばした。最後の仕事である店の解体では、とにかく早く酒を飲みたいT君が腹をすかせた熊のように暴れまわり、一気に店を潰してしまった。お待ち兼ねのコンパは思いっきり盛り上がり、もう少しで売上を全部飲みつぶしてしまうところだったが、何とかそれは免れ、「記念品としてペーパー・カッターを購入する」という“素晴らしい成果”を残すことが出来た。

◆ なお、この原稿は上記の二人のほかTさん、E君、T君などの協力により非常に無責任にパワーアップされたものである。



卒業旅行

卒業旅行を振り返って

甲南大学 文学部 四回生 辰巳 法光

「人は自分に還るために旅をする。」という言葉をごどこかできいたことがある。旅での発見は新しい自分の発見となるのかもしれない。思えば、あつという間の一年だった。卒業旅行をするとは信じられない感じがある。ゼミの仲間から、そして谷口先生から得たものは決して小さなものではなかった。これからも人生という旅を続けていく上で、ぜひとも必要なことを学んだと思う。長い長いトンネルを抜け出て、無限の拡がりを見せながら遙か遠くまで続いてゆく道があるのにやっと気付いたような私にとっては、まさにターニング・ポイントとなった一年であったように思う。

先生の人柄に魅かれてゼミを取った。「いい加減な……。」と言われようが仕方がない。そんな単純な動機でゼミを取った私にとって、ゼミは驚きとためらいの連続であった。いまから思うと自分自身の無知さ加減に苦笑してしまうほどだ。ゼミの活動は一貫して自然破壊、環境汚染といった公害問題を取り上げてきた。それを通して自然に対する人間の傲慢さ、いつのまにか経済大国となった日本に浴びせられる光と影、その見落とされがちな部分にも焦点をあて、ただ徒らに公害反対を叫ぶのではなく、豊かさ、便利さと引き換えに公害を許す気持ちは私達の意識の中に存在することを批判し、気付いていこうという方法で公害問題をとらえてきた。そのかいあって昨年は念願の砂田明氏をお迎えし、神戸で公演を実現させることができたのである。こ



初日
白浜の海岸にて、後ろ
に見えるのは円月島

のゼミ活動の大きな意義を知るのに一年かかってしまったのではあるが、それでもゼミ活動で得たことは知識のみにとどまることはないと思った。

ゼミのあまりの居心地の良さにボーッとしていたことを考えながら白浜の駅に降り立つとそこではもう桜が咲いていた。三月の初めだというのに風は暖かく潮の香りが漂ってきそうな気がした。旅の日程は、一日目は神社、三段壁、千畳敷をまわって一泊し、その翌日ワールドサファリで楽しんで超巨大ホテルで一晩過ごし、三日目に那智の滝と那智大社を訪ねた。いろんなハプニングもあったが、なかでも印象に残っているのはワールドサファリ。ここでは、たくさんの動物が飼われている。そのなかで人目をひくのは、イルカくんとアシカたち、それにシャチの曲芸である。シャチは水中を縦横無尽に泳ぎ回っている。インストラクターのお姉さんにすっかり馴れていて、甘えたりジャンプしたり一緒に泳いだりして楽しそうな感じだ。野生のシャチは残忍で凶暴だときくが、ここではそんなシャチの姿はない。

「どなたかシャチとキスしてみたい方はいらっしゃいますか。」とインストラクターの声がした。あたりは急にシーンとなった。誰も何の返事もない。いくら人に馴れているといってもシャチだ。誰もが少し不安を覚えたのかもしれない。

「幼稚園の坊やはどうかな？」シャチの曲芸を見にきていた幼稚園児がたくさんいたのだが、やはり返事はなかった。

「それじゃ、どなたかを御指名させていただきますましょう。どなたか……。」

その時、突然後ろで「はい。」と声が出た。振り返ってみるとOGのNさんが手を挙げている。そして、あれよあれよといううちに、台にのぼってシャチと仲良く頬ずりして記念写真におさまってしまった。このとき、何て素敵なお人なんだろうと思った。私なら相当の勇気が要る。Nさんには勇気など要らない。なぜなら、人間と動物という立場



旅館「朝日」にて、みんなが手に持っているのは“さんぼんかん”という地元の名産

からシャツをみるのではなく同じ生きとし生けるものとして接していらっしゃるから。大きな愛を持ってらっしゃる方だなあと感じた。

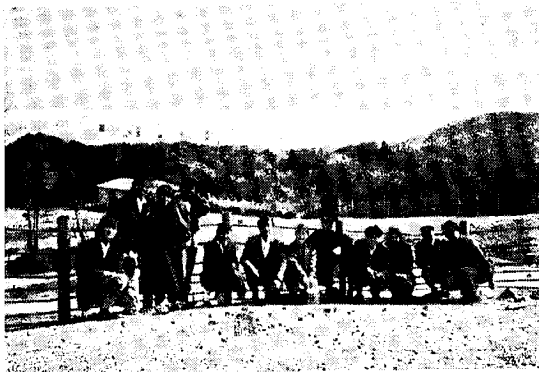
その夜、「浦島」という浦島太郎もびっくりして腰を抜かしそうな、誰かの言葉を借りれば三ノ宮の地下街を浴衣を着て歩いているような気になる大きなホテルに泊まった。そこでみんな一部屋に集まった。不思議なものだ。もとは、みずしらずの他人だった人たちが何らかの縁で結ばれ一年過ぎし今ここにいる。先生の許容量の大きさとゼミを支えひっぱってきたYさん、Nさん、Sさん、Aさん、残念ながら急用で参加できなかったTくんをはじめ、みんなのおかげで貴重な別の意味のゼミ体験ができたと思う。みんな、どんな想いをかみしめながら、ひとつの節目に別れを告げる旅である卒業旅行をとらえているのだろう。いつになく、みんな、しんみりとしていたことが忘れられない。谷口先生に巡り逢い、自分に還り、また新しい旅へと道を一步一步確かめながら進んでゆこうとしている。

1988年度谷口ゼミ卒業旅行運営後記

甲南大学 理学部 四回生 大内 雅勝

今年度の卒業旅行は、1988年3月1日～3日に、白浜、紀伊勝浦へ行った。今回、旅館の予約以外は一切計画されなかった。幹事が“数学専攻”であるという特徴をいかんなく発揮していた。なお、二年前の卒業旅行の幹事も同じ数学専攻のW氏であったが、その時の旅行は分きぎみのスケジュールという“好対照”であった。

3月1日午前10時、梅田ビックマン前で集合。谷口先生は9時半に来られていた。にもかかわらず幹事が10時10分に到着して、やっと全員集合。さっそく環状線に乗って天王寺へ。ここから11時発の特急く



二日目
アドベンチャーワールド
で、オルカのショー
を見たり、象やトラを
見るなど、楽しく遊び
ました。

ろしおに乗り一路白浜へ。約2時間の列車の旅であった。昼食は車内で駅弁を食べたが、その間幹事は、今日の予定を決めるのに必死であった。白浜到着後、今日泊まる旅館「朝日」までタクシーで行くことになった。幹事は、途中、運転手と話し込むうちに、まんまと白浜観光コースの契約をさせられてしまう。そのため、旅館に荷物を預けるとすぐに白浜観光となった。まず円月島へ行き、美しい風景をバックに記念撮影。次に歓喜神社へ。喜ぶ女性達を説得して、三段壁へ。エレベーターを使って地下の鐘乳洞へ行き、ここでは大きな波をかぶってしまうというハプニングもあった。最後に千畳敷へ行って旅館に戻るという約2時間の忙しい観光だった。旅館に着いて一服し、海に見える露天風呂に入った。さて夕食ですが、大きな広間に我々十数名だけで、中居さんに気を使いながら、静かにおいしい食事をいただいた。

翌朝、旅館近くの千畳敷で記念撮影し、白浜アドベンチャーワールドへ。今日は休園かと、幹事を青ざめさせるほどガラガラの園内で、まずはオルカのショーを見た。ショーの半ば、係りのお姉さんがオルカにキスをしてもらう人を募ったが、OGのNさんが多くの子供を差し置いて壇上に登り、オルカにキスしてもらった。それ以来なぜか、幹事の芸のレパトリーの一つにオルカの物まねが加わった。スピード感あふれるイルカのショー。客が少ないせいか手を抜いていたアシカのショーを見て、サファリへ行った。車内からシカやラクダといった草食動物、ライオンやトラなどの肉食動物を見てまわった。多くの動物の中で、ゼミ三回生のT君に似たヒグマが、飼育係にあいそをふりまきながらえさをねだっている姿が印象的であった。その後遊園地でゴーカートに乗ったり、迷路へ行ったり、童心にかえって遊んだ。「明日もここにせえへん？」と心残りそうに言われる谷口先生を説得して、次の宿泊地勝浦へ行った。陽もとっくに沈んだ勝浦の港で、我々は旅館までの連絡船に乗った。約5分の船旅の後に着いたホテル浦



旅館「浦島」にて、豪華な食事を前にして先生のお話を聞く

島は、とんでもなく大きな旅館であった。その中には、土産物屋や飲食店にとどまらず、はては、カラオケバーやディスコまであった。旅館の大きさと豪華さにとまどいながら、食事を済ませ、この旅館ご自慢の洞窟風呂へ行った。太平洋の荒波が打ち寄せるその洞窟風呂は、我々に温泉の醍醐味を堪能させてくれた。

次の朝は、小雨のパラつく中、タクシーで那智の滝、熊野大社へ行った。高さ133mの日本一の那智の滝。その雄大さにしばし時を忘れ見とれてしまった。あまり長時間タクシーを待たせたために、タクシーの運転手は集団自殺したのではないかと心配していたようだ。西国第一番札所の熊野大社では、あいにくの天気のために景色を楽しむことはできなかった。ここでは三回生のNさんが、大きなおみくじを小さな体で軽々と引いていたのが印象的であった。再び勝浦に帰り、昼食をとったが、もうどこも行く所がないので大阪へ帰ることにした。



これも「浦島」にて、この日、Oさんはお酒をついだり、ビールをついだりの大活躍！

三日目
那智の滝をバックに



途中から参加したSさんを囲んで楽しそうな帰りの車中

今回の夏季ゼミナール研修旅行では、初めてVTRによる記録を行いました。今までにない試みなので、カメラマンを担当した者は当然、撮り方がある程度練習し、打ち合わせをしなければならなかったのです。しかし実際は思うようにいかず、水俣市内見学の時など殆どVTRを回しっぱなしでした。また、水俣湾の周りの風景を撮っている時に、“有機水銀によって汚染されているとは、とても思えないほど魚の数が多く、たいへん綺麗な海だ”と感心しているとみんなが先に行ってしまうなど、どんくさい話は幾ら数えてもきりがありません。また反対に撮られる側も常にカメラを意識している有様で、カメラを向けると逃げた人や後ろを向く人、突然真面目になる人など、見えて不自然なシーンも多くありましたが、慣れていないので無理ありません。そうこうしているうちに合宿も無事に終わり、気が付いてみると全長13時間という記録テープの山が出来上がっていました。それで何が大変かと言いますと、この13時間の記録テープを1時間に編集することです。これは言葉にするのは簡単ですが、実際に行うと大変な時間と労力を必要とします。

編集は8時間のテープを3～4人で分担し、その内容から必要な所を抜粋し要約をします。これは原稿のテープ興しと同様で、VTRを何度も見て要約を繰り返します。それが終わると次に、各部分の継ぎ合わせ、全体のバランス、時間を考え再び要約を行います。この段階は原稿の校正と同じで、また幾度も繰り返します。そうしている内に、VTRの言葉が頭の中に残ってしまい、日常会話にまで時たま出てくるほどです。ある程度まとまった所でテロップやナレーションの入れる所を考え、さらにもう一度全体を見ます。こうして出来た骨組みを編集集機材のある場所へ持っていき、いよいよテープの継ぎはぎを行います。画面の継ぎ目は人の声や動作の流れによって決めました。このようにして画面が出来上がり、次に音入れを行いました。これは普通はやらないのですが、今回は全体の音も小さく、音楽やナレーションを入れなくてはいけないので全体の音を入れ直すことにしました。これは編集した画面を見ながら手作業で入れていきます。しかし、手を叩く画面があつてから“パン”という音が聞こえるなど、画面と音声不一致しない所も数多くあり、編集者をかなり困らせました。

このようにして出来上がった編集テープを谷口先生やゼミ生、OBの方々に見ていただいて、いろいろな意見を聞き、4回目にしてようやくまとめた編集テープが出来上がりました。最後にこの編集を通して感じたことは、音楽やナレーションの効果がかなりあるということですね。このVTRテープを見て、素人でもここまで出来るのかと自画自賛できる程です。谷口先生の様々なアドバイスや多くの方々に手伝って

頂いたおかげでこのような素晴らしいVTRが出来たと思います。編集スタッフ一同、心から感謝しております。ありがとうございました。

VTR 編集代表者：岩田 哲郎
天野 雅夫
阪田 和子
植木 通博

∨

卒業論文

<目次>

序

第一章 仮面の論理

第一節 仮面の定義とその機能

第二節 ペルソナ

第三節 他者性

第四節 主観・客観ののりこえ

第二章 〈おもて〉を明らかにするための実相

第一節 坂部理論の概略

第二節 「能」を具体例として

(1) 直面(ひためん)

(2) 声

(3) 離見の見

(4) 能から変身へ

第三章 仮面と〈おもて〉の展望

第一節 イメージ

第二節 演劇的知

結論

序

昨年12月、砂田明氏の「現代夢幻能」と銘打たれた〈天の魚〉を見た。それに触発されるように、一度見てみたいと思っていた能を、先日初めて見に行った。どちらの公演においても、仮面のさまざまな表情と厚みを見せつけられたような気がした。また、幼い頃のお面の記憶とあいまって、畏怖と魅惑とをそそる仮面の威力が知りたくなった。そしてここでは、「仮面と素顔」という従来の対立的な考えかたではなく、「仮面と〈おもて〉」という、仮面を別の視点から捉える方法で話を進めていきたいと思う。そこで、第一章では、なぜ仮面を問題にするのか。第二章では、仮面の働きの隠された側面をより明らかにする〈おもて〉の問題には、どのような課題があるのか、第三章では、「仮面と〈おもて〉」という視点から、いったいどんな展望が開けてくるか、ということを考えていきたいと思う。

第一章 仮面の論理

まず、「仮面とは何か」ということだが、これを辞書的な定義で示しても「おおいかくす」マスクとしてのメカニズムはある程度理解することができるが、仮面の本質については、何ら明確になっていない

と考えられる。今まで仮面は、中心をもってまとまるような主題的なものではなくて、拡散的で捉えどころのないものであるために、哲学の観点からは軽視されてきた。しかし最近では、様々なアプローチから多面的な研究が盛んになってきている。その中で、哲学者の中村雄二郎は、仮面には「四つの働き」があると発言している。私は、その働きを各節において順次補足説明していくことにした。仮面は、その表す役柄へと変える「かくす」と「あらわす」との矛盾した二つの機能をもっているが、能役者の観世寿夫は、「面の中に隠れてしまう」という要素、つまり面のなかに隠れているから思い切りやっつけやろうという、そういうものは自分のなかに確かにあるんだ」という。そうになると、「かくす」ことによって「あらわす」機態が大きく働いて、人間の内部の世界を外部に結びつけることができるのだ。それは、内部の深層を解放することになる。まだまだ「仮面とは何か」という問いに対して、明確な答えはできないが、仮面を問題にすることによって、我々がこの身体をつねに主体的に生きていくことを考える手がかりになるだろう。

第二章 <おもて>を明らかにするための実相

「仮面」という言葉は、どうしても「素顔」との二元対立を強く連想してしまう。この問題を解決するため、坂部恵は『仮面の解釈学』において、<おもて>ということばを用いている。この章では、<おもて>の諸側面を氏の考えかたを軸に進めていく。まず、彼は日本語の<おもて>という言葉で、現在で言う「仮面」と、「普通の顔」「素顔」のどちらも意味することに着目している。はじめに、我々が<おもて>を表面、表象、現象としてしか捉えていないことを指摘し、<おもて>と<うらて>が、絶対的で相互に変換不可能なものとして、平板な現実感覚に埋没しがちである、という。そして、<おもて>を「<主体>でも<主語>でもなく、<述語>にほかならない」と捉えている。<主語>は一義的に固定してしまうけれど、<述語>は具体的な場面、舞台でいえば、特定の役を演ずる役者のおもてにかけられ他の劇中人物あるいは観客との間におかれることによって、はじめて完全な意味と<ところ>を得て生きる。また、<おもて>は「自我と世界、自己と他者との一切の意味づけの失われるわたしたちの存在の場の根源的な不安のただなかから、はじめて同一性と差異性が、意味と方向づけが、<かたどり>を得、<かたり>出されてくる、まさにそのはざまの別名にほかならない。」としている。次に、私は坂部理論をふまえて、仮面と直接関わり、氏の著作にも出てくる「能」、特に世阿弥の考え方を中心に、<おもて>の諸側面を考えることにした。

第三章 仮面と〈おもて〉の展望

仮面と〈おもて〉の展望とは、生きた仮面の感覚をとりもどすためにはどうすればよいか、と考えることである。デカルト主義の二元論では、多様で変化する現実の重層性をよく捉えることができなくなった。仮面でいえば、「仮面」と「素顔」を対立させ、仮面を表面、表象、現象としてしか捉えることができなくなった、ということである。このような考え方が排除したもの、あるいは失ったもののうち、最も基本的なものは、イメージあるいはイメージ的全体性として捉えること、といえるだろう。もっとも、西欧の近代哲学と近代科学によって代表される〈近代の知〉のうちでも、デカルトによるイメージの追放があったあと、なにかとイメージ性の回復が企てられた。しかし、現代においても〈近代の知〉の制約を逃れたいところがある。そして、〈近代の知〉は、生活と文化の実にさまざまな領域にまで及んでいながら、我々は、なかなか気づいていない。〈近代の知〉を乗り越える突破口として、中村雄二郎は〈演劇的知〉を提唱している。〈近代の知〉では重層的現実を捉ええなくなった現在、我々は〈現実〉あるいは〈世界〉そのものから学ばなければならない。ここで〈世界〉や〈現実〉をさまざまな新しい相において見ることができ〈仕掛け〉が必要である。演劇はそのような〈仕掛け〉ではないだろうか。演劇が、作者と出演者、俳優たちがそれぞれにもつ個的な偶然性同士が出会い、ぶつかり合って芝居と重層性と出来事を深め、観客である我々はその演戯＝戯れのなかに、おどろきと発見を見い出すように、世界や現実の構造的出来事性のなかに意味するものを読み取り、交流することで、我々の身体を主体的に生きることができようというのである。そうすると、〈演劇的知〉とは、我々を受動的・受苦的存在として捉え相互主体的かつ相互作用的に物事と自己との間に生き生きとした関係を保つことを示している。

結論

最後に、畏怖と魅惑とをそそる仮面の威力を考えてみる。第一章で、仮面は我々をこの世界に位置づけるものであることを示した。第二章において、〈おもて〉の二義性、「身体」の身体と肉体の二義性などの、人間の根本的にアンビヴァレントな接点、はざま、「あらゆる同一性と差異性の措定の源」に我々を位置づける仮面の働きを表す。ここに、日常的なあるいは平板化した文化的秩序を侵犯する畏怖とともに、それをおして差異を新しく再構成する魅惑の仮面の威力を見ることができよう。そして、第三章では、我々は、〈近代の知〉、能動的な知ではなく、〈演劇的知〉における受動的存在によって、その「源」に「ふれる」ことができるとことを示した。また、我々は受動的存在であることによって、この身体を主体的に生きていくことができる。しかし、我々の日常のなかでは、それと気づかずに〈近

代の知に侵犯され、生きた仮面の感覚を失っている。けれども、雲間が晴れるように「生きた仮面」を感じるときがある。砂田氏の「天の魚」がそうであった。三代にわたって水銀に侵されながら、人知れず死んでいった人々やすべての生き物へのいとおしさやあきらめに近い悲しみが、爺さまによって淡々と語られる。爺さまの面（おもて）は、明かりの陰影を含み、手足の動きによって表情となり、私の心に浚みてきた。

＜参考文献＞

- ・山城祥二編『仮面考シンポジウム』（リプロポート、1982）
- ・河合隼雄『ユング心理学入門』（培風館、1967）
- ・渡辺守章『仮面の身体』（朝日出版社、1978）
- ・坂部 恵『仮面の解釈学』（東京大学出版会、1976）
- ・世阿弥『日本の名著10』（中央公論社、1969）
- ・中村雄二郎『魔女ランダ考』（岩波書店、1983）
- ・中村保雄『仮面のはなし』（PHP研究所、1984）
- ・砂田 明『海よ母よ子どもらよ』（樹心社、1983）

クリムトとその時代

甲南大学 文学部 四回生 田中 素子

「ルネサンス」のようなひとつの新しい芸術傾向が、再びヨーロッパに「世紀末芸術」として訪れたのは19世紀後半であった。

近代工業の発達とともに成長した資本家たちをパトロンとし、芸術家は華麗で甘美な「世紀末芸術」を作り上げた。

折しもウィーンは、要塞に取って変わりリング・シュトラッセ（環状道路）が作られ、そしてそのまわりに次々と建築物が建てられて、まさに古き時代から新しい時代へと移り変わっていた。

そしてまた、ハプスブルク王朝崩壊寸前の暗い影を落としていたウィーンは経済的繁栄と社会不安・政治的危機という緊張状態を齎し、「光と影」をもつ渾身芸術を生み出した最も世紀末の特色をもった都市であり、クリムトはその時代の代表的な画家だった。

ここでは、クリムトの作品を中心としながら、ウィーンの19世紀の芸術とその背景となった社会・政治体制について思索する。

Ⅰ. ブルク劇場 階段の間

グスタフ・クリムトは1862年7月14日、ウィーンの郊外に金細工師の長男として生まれた。14才の時、工芸学校に入学し、7年間、歴史主義的精神に則って技巧の基礎と美術、美術史などを学んだ。この頃

歴史画家、ハンス・マカールトからも影響を受けたといわれている。1883年に「芸術家コンパニー」を設立し、劇場の天井画、舞台装飾など多くの注文を受け、建築装飾家として仕事をもつようになった。その後「芸術家コンパニー」は当時リング・シュトラッセ（環状道路）の大改造を行っていたウィーン市より新しいブルク劇場と美術史博物館の壁画の製作を任されることになった。そしてまたその取り壊し前に描いた旧ブルク劇場の観客席の絵ではクリムトはその写実的技巧を駆使してウィーン社交界の人々を描いて賛美され、皇帝賞を獲得した。新ブルク劇場の天井画も、美術史博物館も実証主義的な歴史精神に則って描かれたため、ともに時代のアカデミックな正統派に受け入れられ、クリムトは若くしてその才能を認められたのである。

Ⅱ. ウィーン大学講堂 装飾画

無力な政府に対して不満を持つ若者は次々といろいろな分野で伝統への反逆を企て始めたが、クリムトも歴史絵画からの分離を目指し、新たな芸術を生み出そうと「ウィーン分離派」を結成した。そしてちょうど文部省から委嘱されたウィーン大学の壁画に新たな試みを発表する機会を得たが、伝統的な様式の枠組みから人間の本能を解放し真の姿を捉ようとしたクリムトは、合理主義的信念のアカデミックな人達によって一斉に非難を浴びた。これは以後、ウィーン中をスキャンダルに巻き込む政治的問題へと伸展した。結果、民族問題を解決するため超民族的政策としてコスモポリタンの精神を持つ近代芸術を保護しようとしたクリムトを登用した政府の試みは失敗におわり、クリムトは喧嘩から逃れ外への啓発的製作を止め、より内面の世界を描くことになる。

Ⅲ. ふたつのフリーズ

結成以来、絵画展を開いてきた分離派は第14回分離派展にあたり、マンネリを打破しようと、クリンガーのベートーヴェンの像を中心に理念を持って装飾し、統一した空間を製作した。クリムトは「交響曲第9番」をモチーフにフリーズを平面的な手法で描き、絵画の技巧を写実性から装飾性重視へと移行させ、内容も「全人類愛」という精神化された象徴的な作品を手掛け、画法を変えただけでなく芸術家として新たな心境を見いだした。つづくストックレ・フリーズでは装飾技術が確立され、その後自己の内面性、精神、本能、願望という抽象的な作品を象徴的に描くようになる。

Ⅳ. 黄金の時代

大学講堂装飾画、ベートーヴェン・フリーズと人々に反感をかってきたクリムトは、一方で独自の装飾様式を確立して華麗な世界を生み出し、画家としての最盛期を迎えていた。

一部の上流階級の婦人に肖像画家として人気のあったクリムトは、装飾的効果を高めるために金箔を用いて絵の中に黄金の世界を繰り広げ、まさに彼の黄金の時代を迎えた。「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像」はその代表作であろう。

クリムトが黄金で装飾した絵の中のエロティックな「官能の美」は死や罪悪や澤庵のイメージと複雑に融合されて世紀末芸術の特色を色濃く浮かび上がらせている。当時、伝統的道德を重んずる上流階級の間でタブー視されていた「性」はここではベールに包まれ、現実的な社会・政治問題と世紀末感に恐怖を抱いている人々を快楽と眩惚という美的幻想の世界へ誘っているのである。

V. 生と死

愛と死のバランスの中に人生をみつめ、「性」に関心を抱く世紀末の風潮は「性」に関心の深かったクリムトにも見られた。だが晩年、彼は「性」を単に快楽だけを瞑すものではなく「生と死」に結び付けて考え、「性」を積極的に肯定し、「愛と性」を、「生と死」の問題を真饒に見つめ直すようになったのである。

世紀末は現実性という課題に背を向け、個人の心理的・内面的世界に深く入っていく時代であった。

<参考文献>

- ◎R.オーキー「東欧近代史」(穂草書房、1987)
- ◎Carl.E.Schorske「FIN-DE-SIÈCLE VIENNA POLITICS AND CULTURE」(ALFED A.KNOPF,INC., 1980)
- ◎カール・E・ショースキー「世紀末ウィーン」(岩波書店、1983)
- ◎W.M.ジョンストン「ウィーン精神I」(みすず書房、1986)
- ◎中山公男編「アート・ギャラリー 現代世界の美術7 クリムト」(集英社、1985)
- ◎日本アート・センター「新潮美術文庫37 クリムト」(新潮社、1975)
- ◎C.M.ネーベハイ「クリムト」(美術公論社、1985)
- ◎野村太郎「クリムトのデッサン」(岩崎美術社、1986)
- ◎Dr. Ilona Sarmany-Parsans「KLIMT」(Crown Publishers, 1987)
- ◎「美術手帖(3月号)」(雑誌)(美術出版社、1986)
- ◎Peter Vergo「ART IN VIENNA 1898-1918」(Phaidon Press, 1975)
- ◎ニーケ・ワーグナー「世紀末ウィーンの世界と性」(筑摩書房、1988)

空間と人間の関係についての考察

甲南大学 文学部 四回生 天野 雅夫

<目次>

序論

1. 意識と空間についての心理学的考察
2. 自然科学における空間認識
3. 知覚と空間の関係についての哲学的考察
4. 西洋的考察から東洋思想へ
5. 東洋思想は空間をどの様にとらえているか
6. 東洋的空間把握としての風水
7. これからの空間論について

<要約>

本論文において、各項共通して問われている問題は、「空間とはなんだろうか」というものである。現在我々は「空間」を、「生活空間」「物理空間」「居住空間」といったことばで、分けたりつなげたり区切ったり重ねたりしている。これはあたかも「空間」を自由に支配し理解しているかの様であるが、はたして本当にそうなのであるか。この様な事から「空間」について再考察してみると同時に最初の問いに解答を与え、空間と人間の関係を明らかにしてゆく。

「空間」に関する考察は、現在過去を問わず様々な分野において進められている。例えば、科学の分野でも心理学、物理学、生物学、地理学などがあり、哲学においても包括的にのべられている。さらに思想という観点では、世界中の諸民族の思想の中にも空間に関するものが、世界観という形をとっているものが見い出す事が出来る。そこでまずそれぞれの考察にふれて見たいと思う。

心理学においては、空間を「意識」との関わりにおいて考察している。ここでは、D・カンターの提唱する「場所の概念システム」を手掛かりに考えていく。D・カンターは、人間が空間を把握する時の最も一般的な手段としてマッピングをあげている。この人間が空間を表した地図（つまり知覚された世界）と実世界（Real world）としての地理学的実測地図の比較によって、人間と空間がどの様な関係にあり、それによって空間の本質を明らかにしようとしている。

次に物理的において考えられる空間とは、どの様なものなのだろうか。アリストテレスは、空間を<事物を包括するものの内側の境界>として定義している。この様な考え方はニュートンの<絶対空間>についての考え方が出現するまでは、最も一般的な、定義であった。近代に入るとこのニュートンの考え方も、E・マッハ、L・ランゲ、J・C・マックスウェルらによって批判され、さらにアインシュタインの相対性理論によって<絶対空間>はその必要性を否定される。現

在では空間を、10次元あるいはそれ以上の次元のものであるとしている。

この様に心理学、物理学は、空間について考察している。ところが、ここで大きな問題に我々は直面する。それは、この様にして促えられた空間概念には、我々生きている人間が座る場所は確保されていないのである。つまりその思考の基本的な所で、空間を物質として客観的な所から促えるという<二項対立>的な考えが存在しているのである。ところが、この分けられた二項は、本来分離する事が出来ないもので、空間についてさらなる考察を進めるためには、この分離を元にもどし統一的に考えなければならないだろう。

そしてこれをふまえた上で、二項対立的構図を取りさった真の意味での空間を、考察するためには、1)空間に時間をどの様にして織り込んだらいい、2)そこで行われる生命活動をどう理解し、そして3)死んだ空間をどう生き返らせるか、という事を考えなければならない。

では、この二項対立を崩し、さらに生きた空間を生きたまま促えるためには、どうすればよいのだろうか。鈴木大拙は『東洋的な見方』において次の様に述べている。「西洋の人々は、物が二つに分かれてからの世界に腰を据えて、それから事物を考える。東洋は大体これに反して、物のまだ二分していないところから、考え始める。……中略……自分の主張では、二分性で人間生活を割り切るべきでない、また割り切れる物でないということをも主張し、それから、今後に出て来るべき世界文化なるものの完全性は、二分性だけでは、どうしても獲られるべきないと、主張するのである。東洋的な考え方、感じ方、それをもちたてることによって、二分性文化の不備を補足していかなければならないのだ。」

では、いったいどうすれば東洋思想の中から、二項対立を基盤とした文化に欠けている物を見いだせばよいのか。確かに東洋的思想は、空間を力動的なものとして捉え、その表現の中には、生命力が感じられるが、理論的な構築という点では、まだなされていないのが現状である。

この様に我々は、空間に対して明確な解答を与える事は出来ない。これはつまり、「空間とは何か」という問いの中には、「世界とは……」「そこに存在する人間とは……」という問いが含まれているからにほかならない。いいかえると、我々人間＝空間と言えるかもしれない。そしてさらに空間を考え、空間と人間の関係について明らかにし、人間とは何かを問うためには、その点を注意する必要があるだろう。

<参考文献>

- ①『日本の空間構造』
- ②『場所の心理学』
- ③『音を視る、音を聴く』

吉村貞司
デビット・カンター
大森荘蔵+坂本龍一

- | | |
|------------------|------------|
| ④『流れとよどみ』－哲学断章－ | 大森 荘蔵 |
| ⑤『物と心』 | 大森 荘蔵 |
| ⑥『新視覚新論』 | 大森 荘蔵 |
| ⑦『別冊サイエンスNo.85』 | 日経サイエンス社 |
| ⑧『ニュートン』1988年8月号 | 教育社 |
| ⑨『風土』 | 和辻哲朗 |
| ⑩『境界/祭司空間』 | 井本英一 |
| ⑪『家相読本』 | 光藤俊夫 |
| ⑫『琉球の風土』 | 木崎甲子朗・日崎茂和 |
| ⑬『魔よけとまじない』 | 中村義雄 |
| ⑭『ケガレからカミへ』 | 新谷尚紀 |
| ⑮『鬼がつくった国・日本』 | 小松和彦・内藤正敏 |
| ⑯『東洋的な見方』 | 鈴木大拙 |

『山の音』の信吾の生き方をめぐって

甲南大学 文学部 四回生 阪田 和子

<目次>

はじめに

1. 『山の音』に対する評価
2. 信吾の生き方
 - (1) 信吾の心の動き－記憶・連想－
 - (2) 信吾の夢
3. 信吾の生きている時間
 - (1) 二つの時間・二つの世界
 - (2) 「こと」の世界に支えられた「いま」を生きる
人々の舞台としての『古都』

結びにかえて

はじめに

川端康成の文学については、作品の抒情性や作品に出てくる女性像についての研究が多く見られる。

『山の音』についても同様で、日本の「家」制度というものの持つしがらみや、悲しみ、その「家」の中に生きる人々に対する研究や、ある種の告白文学としての評価は多くされてきた。

しかし私は、それらよりも登場人物、中でも主人公である尾形信吾についてもっと直接的に、彼の生き方そのものを考察することが大切であると考えます。

そこで、今までの通説とは少し異なった立場から『山の音』を読みすすめ、「信吾の生き方」に焦点をあわせ検討することによって「人間の生き方」について考え、更にこの作品をとおして作者が意図した主張が何であるかということ把握したいと思う。

1. 『山の音』に対する評価 (略)

2. 信吾の生き方

(1) 信吾の心の動き—記憶・連想— (略)

(2) 信吾の夢

尾形信吾は62歳、会社でも歳の功でかなりの役職についているようである。妻の保子は信吾より一つ歳うえである。二人の子供を育て上げ、そろそろ実業の世界から身をひいてもよい年齢に達しているといえる。

この『山の音』は、信吾の目を通して眺められる風景や人物が読者に伝達され、それによってストーリーが進められていく。しかしながら信吾自身の気持ち、意志というものについての記述はほとんど見られないのである。

ただ、この作品には信吾の見る夢が八つほど出てくるので、それらを手がかりにしたいと思う。

これらは、生身の、現実の世界に存在している人間が見る夢というのではないので、以下の八つの夢ひとつひとつの解釈というよりも、川端がこの八つの夢を登場させることによって何を書きたかったのかということについて考えたいと思う。

これらの夢を見ることで、信吾は現実の時間の流れと異なった時間を生きながら、自分の心の奥底にある願望を思い知り、成就させる事によって彼の人生における悔恨の根を取り除いたのである。そして信吾は、自分が追い求めていた理想の実態を知って、理想の中に逃げ込んでしまうのではなく、現実の時間の流れに沿って生きることが心の中に受け入れようとするに至ったのである。

机の上に懐中時計と腕時計と、時計が二つ置いてあつた。腕時計の方が二分進んでゐた。

二つの時計はぴつたり合うことが少ない。ときどき氣になる。

「お氣になさるのなら、一つだけお持ちになればよろしいぢやありませんか。」と保子に言はれて、もっともだと思ふが、長年の習慣である。
(「冬の桜」)

これは信吾が二つの時間を生きる人間であることを示唆している。

一つは四季の移り変わりや、生き物の成長に代表されるような止めることのできない時間であり、もうひとつは、信吾の夢に見られたような遡っていく時間である。

3. 信吾の生きている時間

(1) 二つの時間・二つの世界

二つの時間……ひとつは現実の流れゆく時間であり、もうひとつはそれに支配されない時間である。

さて、われわれがふつう「時間」という場合それは時計やカレンダーであらわすことのできる時間をいうのである。実際には目に見えないはずであるにもかかわらず、目に見える「もの」として考え、計っている。

しかし、われわれが生きているのは「いま」（「現在」）だけなのである。「過去」を生きたりすることもできなければ、「未来」を生きたりすることも不可能なのである。われわれは「いま」しか知らないのである。

また、われわれは多くの「もの」に取り囲まれて暮らしている。しかしわれわれの世界は「もの」ばかりで成り立っているのではない。目に見える、あるいは目に見えらるるような「もの」とは全く別の「こと」があるのである。私がここにいるという「こと」、私の前に机があるという「こと」、これらはすべて「こと」である。

そして、われわれはそれらの「もの」を見たり、聞いたり、触ったりする場合においても、「もの」的な属性（大きさや色、形、温度など）ばかりでなく、常にその背後にある「こと」の世界（自分とその「もの」との関係や歴史など）をも同時に感じとっているのである。

「いま」を生きているわれわれも「もの」としての「いま」を生きたりすると同時に、常に「こと」の世界をも生きているのであるといえるだろう。（これについては、木村 敏『時間と自己』において精神医学の現場から考察されている。）

この「いま」とわれわれの関係について述べたハイデッカーの言葉を、『時間と自己』に見ることが出来る。

われわれが「いま」というとき、それはいつも「いまはこれこれをするときだ」、[いまはまだいついつまで時間がある]などの意味でのいまである。

このようないまは、なにかあるものではない。それはむしろ、そのつどの私自身のことである。なにをするにも時間を必要とし、時間を見込んでいるわれわれの現存在自身が、「いま」ということばで自分自身を言い表しているのである。いまが時間の一区切りではなくて時間それ自身だとするならば、時間とは要するにわれわれ自身、私自身のことでなくてはならない。

ここで『山の音』の信吾の生き方をふりかえってみたい。

彼は記憶や連想に入り込み、また、夢の中で人生における悔恨の根を取り除くことによって、彼が彼であろうとして生きていたといえよう。彼の夢は「こと」の世界である。この「こと」の世界を生きたからこそ、彼は彼自身たりえたのである。

信吾は「こと」としての「いま」を生きたのであり、自己が自己であろうと生きる時、彼は真の意味で生きているということがいえる。またそのとき、彼の生命は輝きを放つのである。

(2) 「こと」の世界に支えられた「いま」を生きる人々の舞台としての『古都』

(略)

結びにかえて

われわれは日常の生活の中で、『山の音』の信吾の生き方を通して見てきたような真の意味で生きるということについてあまりにも無関心ではないだろうか。

われわれは身のまわりの「こと」や「もの」を、それらと一定の距離をおいて客観的に観察することによって「もの」として見るという思考法が、現代の自然科学などの基礎にあるすぐれたものであると思ひ込み、それに強く影響されている。

作者は何気なくこうもらしている。

夢の中の時間の不思議さは、なにか信吾をなぐさめた。

(「島の夢」)

私は、生きるということの意味を今一度考えなければならぬと思った。

<参考文献>

川端康成『川端康成全集第十二巻 山の音・千羽鶴』

(新潮社 昭和55年2月刊)

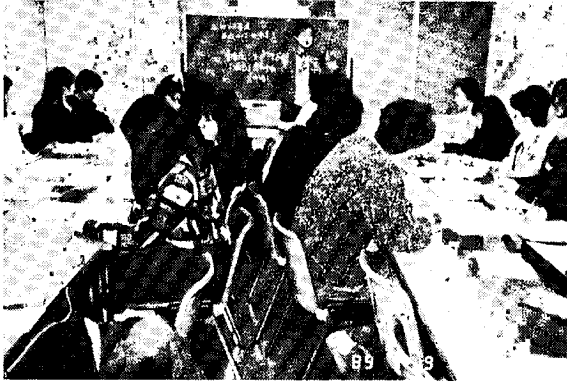
『川端康成全集第十八巻 眠れる美女・古都』

(新潮社 昭和55年3月刊)

川端文学研究会編『<川端康成研究叢書六> 風韻の相 山の音・千羽鶴・波千鳥』

(教育センター 昭和54年9月刊)

木村 敏『時間と自己』(中央公論社 昭和57年11月25日刊)



VI

研究室活動内容

研究発表会

題目：ミヒャエル・エンデのファンタジー界における「時間論」
発表者：谷口 文章

<目次>

1. はじめに
2. 時間論に関する認識論
 - § 1. 時間論の性格
 - (1) 時間把握のむつかしさ
 - (2) 「もの」の世界
 - (3) 「こと」の世界
 - § 2. 「もの」と「こと」の論理と時間論
3. エンデのファンタジー界における時間論
 - § 1. 概観とパースペクティブ
 - § 2. 時間についてのなぞ解き
 - § 3. 『モモ』における「走る」時間
 - 「もの」的な客観時間に対する警鐘—
 - (1) 「走る」時間を生きる人々
 - (2) 「走る」時間
 - (3) 「走る」時間と「もの」的な客観時間
 - § 4. 『はてしない物語』における「遊ぶ」時間
 - 「もの」化された「こと」的な主観時間に対する警鐘—
 - (1) 「遊ぶ」時間を生きる人々
 - (2) 「遊ぶ」時間
 - (3) 「遊ぶ」時間と「もの」化された「こと」的な主観時間
 - § 5. エンデのファンタジーにおける「歩む」時間
 - 「こと」的な主客融合の生きられる時間—
 - (1) 「歩む」時間を生きる人々
 - (2) 「歩む」時間
 - (3) 『モモ』から
4. おわりに

<要旨>

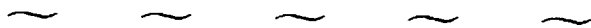
ミヒャエル・エンデは、自らの創作態度について、次のように語る。「私自身が作品中で解釈におちいらないこと、それがじつはほんとうに困難なことでした。いけない、これでは説明になる、と思われるところは捨てる、そういうふうに分人に禁じるのは、骨の折れることでした。なにしろ、すべてを知的に理解しよう、させようとする傾向は、現代人の病ですからね。私はその傾向を自身に厳禁し、私に見え

てくる映像を追い、映像が動く方向に、虚心についていっただけにしました。」(子安美知子『エンデと語る——作品・半生・世界観』, 朝日新聞社)

ここには、三つのことが含まれていよう。第一に、エンデの作品は解釈・分析されるのではなく、「体験される」ことが意図されていること、第二に、人間界における現象をあまりに知的に理解しようとする現代人の傾向つまり近代科学に代表されるような合理主義を、エンデは告発していること、第三に、エンデの創作過程は構想にそって書いているのではなく「心の中から」自然に出てきたこと、つまり深層の世界からの自らの展開を示している、ということが示されている。

そこで、この研究発表では、「エンデのファンタジー界における時間論」を中心に、第一の問題について、エンデの意志とは反しながらも、“動的な”解釈・分析をした後、できれば「体験しながら理解する」方向を示唆したく考える。また第二の近代合理主義の思考方法は、「主観—客観」図式を基本としており、その図式を超えた、いわゆる「もの」と「こと」の論理によって事態的認識把握を援用してエンデの世界を一瞥してみよう。さらに第三の「心の中から」展開する深層心理の世界にもできれば触れていきたいと予定している。

そのために、エンデの『モモ』、『はてしない物語』にあらわれた「時間論」を論旨の展開軸にしたいと思うのである。



「ではいったい時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです。」

(アウグスチヌス『告白』)

「時間はある——それはいずれにしろたしかだわ。……でも、さわることができない、つかまえられもしない、においみたいなものかな？ でも時間で、ちっともとまっていなくて、動いていくものだね」

「光を見るために目があり、音を聞くために耳があるのと同じに、人間には時間を感じとるために心というものがある。」

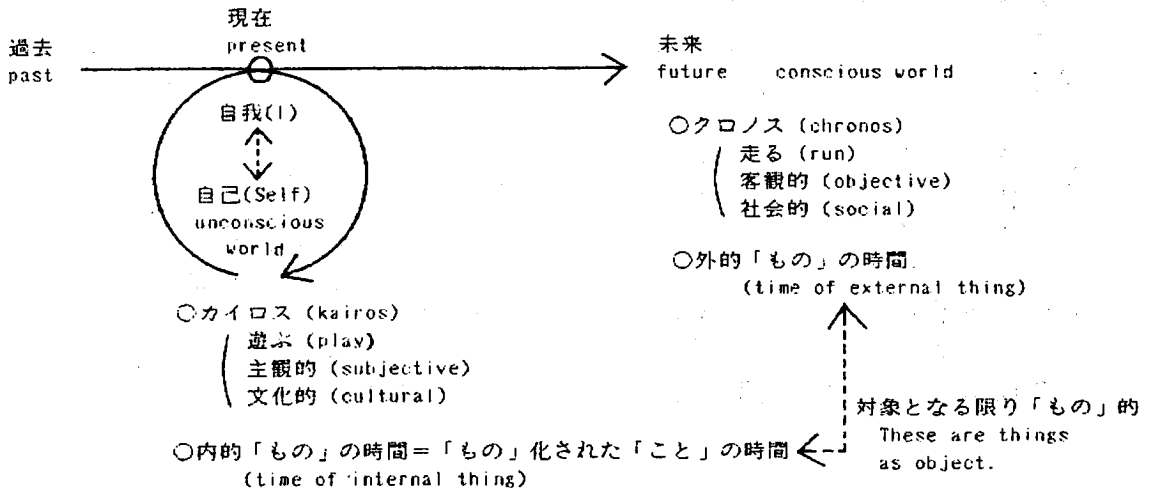
モモ：「でもあたしの行ってきたところ(時間の国)は、いったい何なの？」

ホラ：「おまえ自身の心の中だ」

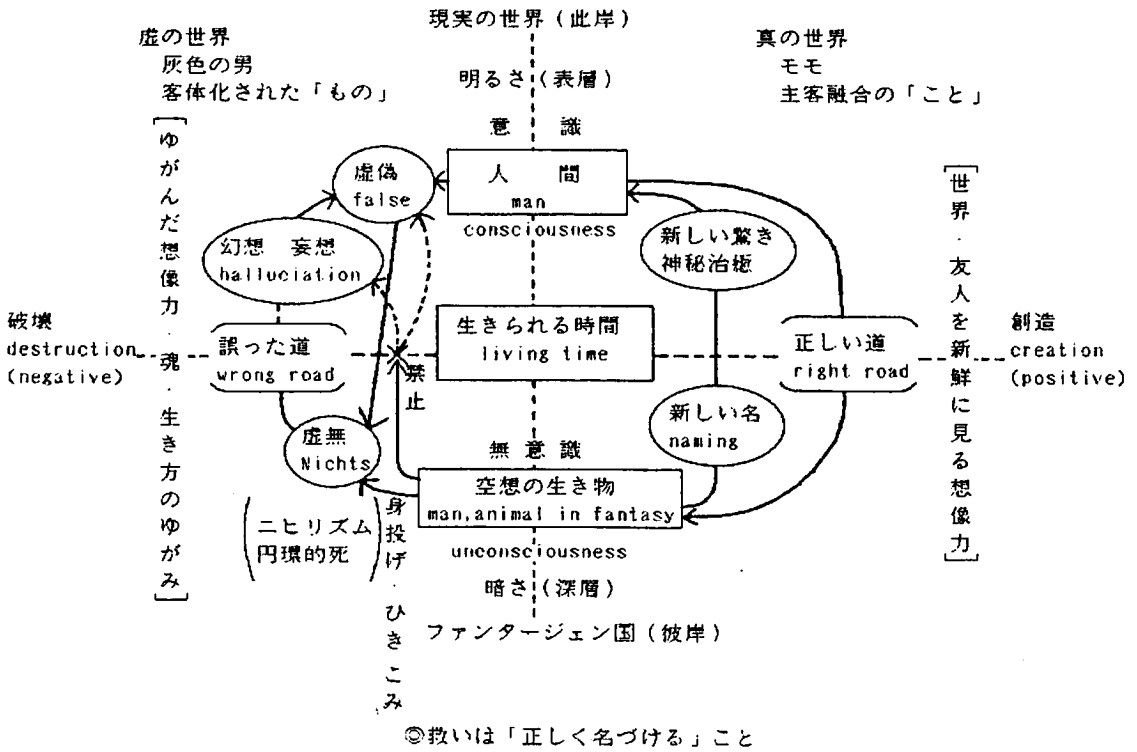
(エンデ『モモ』)

< 『モモ』の時間論 >

- 永遠の現在 (eternal present)
- 生きられる時間 (living time)
- 「こと」の時間 (time as experiencing)



<『はてしない物語』の時間論>



第三回BO研（「心とイメージ」準備研究会）

於；甲南大学、1989年1月27日

講義概要

演習Ⅰ・Ⅱ：4：通年：

心身問題

心身問題は、デカルト以来、哲学の重要な課題の一つである。私たちのゼミでは、西洋思想の立場からここ数年研究してきたが、本年は視点を東洋思想まで広げて考察することにする。

テキストは湯浅泰雄著『身体—東洋的身心論の試み—』（創文社）を使用し、①和辻・西田哲学の「近代日本哲学の身体観」、②芸道・道元・空海を題材として「修行と身体」、③ベルグソン・メルロ＝ポンティによる「心身関係論」、④東洋的瞑想を中心に「東洋的身心論の現代的意義」について考えていきたい。

具体的には、フロイト・ユングの深層心理学や仏教・ヨーガの宗教思想また日本文化論などの知識を援用しながら、発表形式で進めてゆく予定である。

テキストで文献の読み方を修得し、発表で自己表現を養うことを願っている。

哲学特論Ⅰ：4：通年：

イメージーション再考

哲学の重要なテーマとして「意識」の問題があるが、それは従来、理性・感情・感覚・身体などからのアプローチとして取り扱われてきた。一方イメージーションは、哲学の領域において認識能力としての重要な地位を占める反面、空想力やファンタジーとして捉えられ、その能力の信頼性をあまり高く評価されない側面をもつと考えられてきた。

そこで本講義では、イメージーションを再評価して、その創造性や独自の機能を分析し、人間生活の根元に根ざす能力であることを、次の順序で明らかにしていきたい。①精神史におけるイメージーション②意識と無意識におけるイメージーション③日常生活におけるイメージーション④宗教・芸術におけるイメージーション⑤記号・象徴・論理とイメージーション

教科書：エーヴンス著「イメージーション再発見—忘れられた第三領域—」（仮題）（創元社）

西洋哲学史Ⅱ：4：通年：

ルネッサンスから現代に至る西洋近世の哲学史を概観した後、昨年度に引き続き、現代の哲学に焦点を合わせる。

本年度は、現代哲学の諸問題を、特に分析哲学（ムーア・ラッ

セル・ヴィットゲンシュタイン・エイヤー等)と、プラグマティズム(パース・ジェイムズ・デューイ等)、および現象学(フッサール、ハイデッガー、メルロ＝ポンティ等)を考察することによって明らかにしたい。

哲学(A) : 4 : 通年 :

カントは、哲学の諸問題を(1)私は何を知り得るか、(2)私は何をなすべきか、(3)私は何を望んでよいか、(4)人間は何であるか、とした。このような疑問をもつとき、私たちはすでに「哲学している」のである。

そこで、そのような問題意識が存在・人間・真理・言語・行為などのテーマに、どのように展開されるかを考察してみたいと思う。

講義はノートが中心であるが、他方で文献・書物の紹介やVTR・スライドの使用によって、現代の実践的諸問題も提起する予定である。

活動記録

□ゼミナール合宿

◎第十六回ゼミ合宿（1988年3月11日～13日 於：IUSK）

研究発表会

哲学系……………澤瀉久敬「医学の哲学」（誠信書房）

心理学系……………岡田康伸「箱庭療法の基礎」（誠信書房）

教養系……………木村 敏「時間と自己」（中公新書）

谷口文章助教授による箱庭実習・講演

脳死についての討論会

◎第十七回ゼミ合宿（1988年8月16日～19日 於：水俣市）

ゼミナール研修旅行として舞台表現を通して水俣病の真の姿を訴えてこられた砂田 明氏、水俣病センター相思社の高倉史朗氏を訪ねて、市内見学や乙女塚訪問・農園見学と講演・討論会の機会をもつ。

◎第十八回ゼミ合宿（1989年3月13日～15日 於：IUSK）（予定）

谷口文章助教授による講演「M.エンデにおけるファンタジー界についての哲学的分析」、エンカウンター・グループ実習、卒論発表会

※IUSK=関西地区大学セミナーハウス

□公演会「砂田 明 現代夢幻能・仮面（ペルソナ）のカタルシス」（1988年12月23日 於：神戸文化小ホール）

□深層心理研究会第五回公開講座「砂田 明 私の演劇論」（1988年12月24日 於：甲南大学10号館10-21教室）

□第三回谷口会（1988年5月3日 於：京都 福屋）
卒業生、現役生、約30人が集い親睦を深めました。

□ゼミ構成員

岡田ひでよ（文4）	・西田彩子（文4）	・天野雅夫（文4）
阪田和子（文4）	・辰巳法光（文4）	・田中素子（文4）
大内雅勝（理4）	・呑海友子（理4）	・山下智実（法4）
秋山美紀（文3）	・大石優香（文3）	・坂田佳子（文3）
高垣美成子（文3）	・山本たまみ（文3）	・榎本修一（文3）
大江正俊（文3）	・高野由美子（文3）	・小倉啓司（理3）
小林 睦（理3）	・西村由美（理3）	・深谷昌生（理3）
辻 啓之（法3）	・辻 孝司（理2）	・井垣博美（文1）
北村光子（文1）	・吉田拓史（文1）	・岩田哲郎（理修1）

編集後記

1988年度報告書が完成の運びとなりました。先の報告書から文章校正にワープロを導入し、これで三回目になります。ワープロ導入後は、和文タイプ使用時より原稿の読み返し時間を作り、たくさんの後輩も編集作業に参加してきました。作業中、編集員は熱心に意見を交わし、その精神を向上させていきました。またそれは前年度の総復習にもなり、編集員全員に深い思感を、後輩はゼミの雰囲気や学べました。

今年はゼミの活動自体も、シーガル・ホールで公演会を行うなど充実し、それにより、ゼミ生もダイナミックで生き生きとした文章を書いていると思います。このような段階を経て出来た本書ですが、皆様に御指導頂ければ、幸いかと存じます。尚、編集作業に協力して下さった諸先輩方、本当に有り難うございました。

最後に、この一年間を通じて多くのことを教えて下さった砂田明先生をはじめ、夏合宿、公演会、公開講座でお世話になった方々、並びに今回も多方面に御指導して下さった谷口文章先生に深く感謝致します。

編集代表者：榎本 修一
西村 由美
辻 啓之
天野 雅夫

<1988年活動報告書>

編集者 植木・岩田・山下・大内・阪田・辰巳・田中
天野・榎本・西村・辻・光石・村嶋・松本
小西・井垣・北村

発行所 甲南大学文学部谷口研究室
TEL (078) 431-4341

発行日 1989年3月31日

印刷所 甲南大学コピーセンター

写真印刷 ユニバーサル株式会社

